

黄埔軍校の創立(続)

三石善吉

- 一 黄埔軍校概述
- 二 国民革命の思想
- 三 軍校創立への途
- 四 軍校への途(以上第五号)
- 五 中間考察
- 六 軍校への途
- 七 訓練開始(以上本号)

五 中間考察

第一次世界大戦の戦後処理の顛末は、中国の知識人に計り知れないほどの深い絶望感を与えた。陳独秀は一九一八年一月、ウイルソン大統領こそ、国家と人民の自由平等という公理を擁護する「世界で一番立派な人物」と絶賛してパリ会議に期待をかけたが、⁽¹⁾それからわずか半年たらず、中国の山東返還の悲願がほぼ絶望とわかってのち、今や

世界は強盜世界であり、「公理は強権に敵せざる時代だ」と断定し、自国の利益のみを追求する列強に、公理を高唱するウイルソンも「いささか憂鬱ならん」とのべた。⁽²⁾ ウイルソンへの、さらに米國への幻滅、ひいては欧米資本主義文明そのものへの幻滅、これがヴェルサイユ會議の、中国の先進的知識人に与えた大きな影響の一つであった。

それに代つてレーニンの新生ロシアが巨大な影を落しはじめる。すでにロシア革命は、一九一七年一月七日（ロシア曆一〇月二五日）の早朝、冬宮に立てこもる臨時政府が武装解除され、無血のうちに成功した。その翌日、レーニンは「平和についての布告」を發し、無併合・無賠償の即時講和、秘密外交の廃止という新しい平等外交の原則を格調高くうたいあげていた。⁽³⁾

ロシア革命成功のニュースは、いち早く孫文ら国民党人士の注目するところとなり、革命成功の三日後（二月一日）、国民党機關紙「民国日報」（上海）は、「ロシア新政府は資本家の専横と官吏の横暴を排除しようとしているだけである」、「前政府に反対し人民を楽土に導こうとしている」、新生ロシア政府は日本の侵略政策と中国の官吏專制に反対している、と好意的に報道した。⁽⁴⁾ 孫文のロシア革命への共感は、反ツアー運動のために亡命を余儀なくされたロシア知識人たちとの個人的接触があり、同じく專制政府打倒の革命の同志という共通の精神的基盤を持っていたことによる。一九一八年五月、孫文がレーニンに革命成功の祝電を打ち、國際的孤立の中にあつたレーニンをし、「光は東方より」と喜ばせたというエピソードも、そのような文脈の中での出来事であり、これが孫ソ提携の契機ともなつたのである。

まさにこの時期、レーニンの新政府は恐るべき困難な政治状況に直面して、外相チチェーリンのことばによれば、「ブルジョアジー、チェコ兵、そして帝國主義國の鉄鎖の如き銃劍にかこまれて」⁽⁶⁾ 孤立し、外界との交通が極めて

困難であった。ために列強の憶測と恐怖は増幅した。時に中国は、反動的な北洋軍閥（総統馮国璋）の統治下にあり、ロシア十月革命の映像は資本主義列強の極めてゆがんだ反共論調をそのまま踏襲したものであった。ボルシェヴィズムを日本の反共ジャーナリズムにならって「過激主義」と呼び、「共産公妻」などと宣伝した。⁽⁷⁾ 保守的な「東方雑誌」は、「過激思想と其防止策」（君実）なる論文をかかっている。今、政府は強吏にその防止を呼びかけ、かつ、軍事・警察力でこれを防止しようとしているが、過激主義という無形の思想力には有形の軍事力では防ぎきれない、むしろ、社会政策の厲行、民主主義の確立、殖産興業の挺進、平民教育の普及によって防止すべしと。しかし一九二〇年に入ると、この雑誌すらいささか好意的に新生ロシアを紹介しはじめた。とくに、（第一次）カラハ
ン宣言が「時報」「申報」（一九二〇年四月六日、九日など）に載るにおよんで、中国の与論はあげてソ連に向かうこととなる。⁽⁸⁾

中国の人民に絶大な感銘を与えたカラハン宣言（一九一九年七月二五日）は、外務人民委員（外相）チチェーリンの第五回全ロシア・ソヴェト大会での演説を具体化したもので、「中国国民および北方と南方政府」にあてて、中東鐵路ほか中国から奪った諸利権を無償で還附すること、義和団事件の賠償金と領事裁判権の放棄などを、⁽⁹⁾ 一方的に宣言していた。戦勝国の獲物分配会議に終らんとしているパリ会議への、これは真向からの挑戦であった。山東の悲報に打ちひしがれていた中国人は、ここに真の正義人道を見た。雑誌「新青年」の一九二〇年五月一日号には、全国報界聯合会、全国学生聯合会、商界救国総団、中華労働公会など全一五団体の、天津益世報、上海学生聯合会日刊、上海民国日報、北京晨报など全八紙の、ソ連への感謝の文がのっけていて、中国におけるカラハン宣言への反響の一端がうかがえる。それは一言でいえば、強盗世界に正義人道の世界を対置し、「中国を平等に扱う唯一の国」ソ連への賛

美・感謝に満ちたものであった。いまその一例として、杭州学生聯合会のものを全文紹介しよう。

俄羅斯社会主義聯邦蘇威共和国国民及び勞農政府御中、只今勞農政府の通告に接し、限りない喜びです。俄国はこのたび従前の帝國政府の掠奪した種々の特權・土地を放棄され、純潔高尚の道德性を示されたのみならず、人道正義の主張をも実現され、歴史の新世紀を開き、平和の基礎をうち立てられた。およそ人間たるもの、この行為に感激しないものはいないでしょう。中国人民は俄国および全世界の人民と手を取りあって、政治屋、軍人、資本家や掠奪を業とする強盜と闘わんことを切望します。一方では国家、民族、階級などの差別をなくして掠奪の根株を絶滅し、他方では自由平等互助の世界を建設して人類の幸福を増進します。本会は謹んで杭州の学生を代表し俄国の通告に対して、心からの賛同と真心からの謝意を表明します。杭州学生聯合会敬白。

ソ連に感謝の電文を送った団体の中に、商界、実業協會、はては国会議員すら含まれていたことから了解できるように、主權を喪失し、青島を奪われ、まさに国家存亡の秋に当って、突如提示された高き徳性の發露への、人間としての感動・感謝、これがソ連への感謝の動機であるとするなら、この人道主義の受容と人道主義的マルクス主義の受容とは、理論的には無限の距離がありながら、感性的には数歩の逕庭があるにすぎない。問題はまさに古くて新しい問題、理論と実践、理性と感性の問題にかかわっていた。それ故、マルクス主義を真におのれのものとし、儒教に代る、中国統合の新たな思想的武器として鍛えあげていく役割は、商界、実業協會、国会議員の諸氏ではなくて、「歴史の動き全体の理論的理解に努力してきたブルジョア思想家の一部」(共産党宣言、第一章)李大釗、陳独秀らの「新青年」左派とでもいうべき人たちに委ねられることになる。事実、李大釗は一九一八年一月、「ボルシェヴィズムの勝利」なる論文でマルクス主義に転換し、一九一九年二月の「物質變動と道德變動」から一九二〇年の末ごろま

でに、完全にマルクス主義的世界観をおのれのものとする。一方陳独秀も一九二〇年中頃には、李大釗より、より全面的にマルクス主義の陣營に立つことになる。⁽¹⁰⁾この二人の革命的教師のもとに、中国共産党の次代になう若き逸材が次々とマルクス主義に接近していく。毛沢東すら、「一九二〇年の夏には私は理論的にもまた、ある程度実践的にもマルクス主義者になり、この時らしい私は自分をマルクス主義者だと考えてきました」と語っている。⁽¹¹⁾

第一次国共合作前後の、それゆえ黄埔軍校設立直前の、若き知識人の一つの動向を示す調査がある。一九二四年三月三〇日、「新国民雑誌」は朱悟禪の「北大二十五周年記念日「民意測量」之分析」をのせた。その第五問「ソ連とアメリカはいずれが中国の友か」の結果は次のようであった。⁽¹²⁾

美	72	1	0	2	0	0	2	30	107
俄	371	5	4	7	7	7	2	94	497
		学界	商界	工界	軍界	記者	政界	警界	未註職業性別者
									計

極めて不完全な調査であるが、ともかく若き知識人の間では圧倒的に親ソ派であることに注目すればよい。明らかに若き世代は欧米流のデモクラシーを放擲し、中国を対等に扱うソ連の平等外交に自国の存亡を賭けようとしていた。

とはいえ、中国の未来はいかにあるべきか、資本主義か社会主義か、三民主義かマルクス主義かという問題は、まだ絶対的な二者択一として煮つまってきていない。このとき北京の国立法政大学に在学し、のち黄埔第一期生となる孫元良が、共産党よし、国民党もよし、いずれも中国社会の变革改良に共同奮闘するものと述べたように⁽¹³⁾、中国の政治・思想状況は、内、腐敗せる軍閥政府、外、列強の侵略という二つの大きな問題をめぐっていたのであり、この問題解決のためには、あらゆる可能な手段がとられなければならないまい。国共合作はその一つの有力な方法である筈であった。

註

- (1) 『独秀文存』卷一、五八三頁、「每週評論発刊詞」一九一八年二月二二日。
- (2) 同右 六二九頁、「為山東問題警告各方面」一九一九年五月一八日。同、六四四頁、「山東問題与国民党悟」一九一九年五月二六日。
- (3) 『ソヴェト連邦共産党史』上、読売新聞社、一九七二年、三二二—二五頁。『レーニン全集』(大月版)二六卷、二四九—五三頁。
- (4) 丁守和他『從五四啓蒙運動到馬克思主義的伝播』三聯書店、一九七四年、一〇五頁。
- (5) 李劍農『最近三十年中国政治史』台湾学生書局、一九七五年(一九三〇年初版)、五四四頁。
- (6) Xenia J. Eudin and Robert C. North, *Soviet Russia and the East, 1920-1927*, Stanford U. P., 1957, p. 217. 一九一八年八月一日、外相チチェリンの孫文宛の手紙の一節。
- (7) 丁守和他、前掲書、一〇四—〇五頁。および丁守和他『十月革命对中国革命的影響』人民出版社、一九五七年、四六頁、五二頁。
- (8) Allen S. Whiting, *Soviet Politics in China 1917-1924*, Stanford U. P., 1968, pp. 28-29. 王聿均『中蘇外交的序幕』台北、中央研究院近代史研究所、一九七八年再版、四八頁。
- (9) 李陳のマルクス主義への転換については、M・メイスマー『中国マルクス主義の源流』丸山松幸、上野恵司訳、平凡社、一九七一年、第五章参照。
- (10) E・スノー『中国の赤い星』宇佐美誠次郎訳、筑摩書房、一九七〇年、一一四頁。
- (11) 李雲漢『從容共到清党』台北、中国學術著作奨助委員会、一九六六年、八八—九一頁。
- (12) 孫元良『孫元良回憶錄—億方光年中の一瞬』台北、一九七二年、六〇—六一頁。

六 軍校への途

黄埔に投じた第一期生は、多く「中学」(日本の高等学校に当る)卒業以上の高学歴をもち、愛国の情に燃える若者が筆をすてて剣を執るに至ったものである。今ここに、その記録を残している者の何人かをとりあげ、黄埔軍校へ

の途を追跡することによって、一九二〇年代前半の中国の運命とその中における個人の運命とを一瞥することにする。記述はいささか瑣事にわたるが、個人の運命の曲折点における雰囲気^{（1）}をすこしでも再現しようとの意図である。

○王仲廉（一九〇三）の場合

安徽蕭縣西南紅亭郷王小楼の人。家産三百畝の地主の子弟、兄姉と妹、四人兄弟の三番目。家塾で五年間四書五経を習い、一九一五年県立第二高等小学校に入学、さらに、のち国民党江蘇代表となる顧子揚の創立した安徽の徐州中学に入学した。このとき仲廉の回憶によれば、母親は仲廉にこう語つたという。「中国の内乱外患は日に益々劇しく、愛する山河は岌々として危うし、これ正に志ある男児の報国の時である」と。こういつた母の薰陶を受け、彼は「筆を投じて戎〔軍隊〕に従う心を持つた」という。徐州中学ではこの著名な国民党員の校長のもとで救国救民の精神をつちかわれ、同学の王敬久、郭劍鳴、王家修らと「徐州中学連合」を作り学生運動を行なつた。この三人の同学もやがてともに黄埔に投ずることになるが、その経緯は次のようであつた。

一 全大会（一九二四年一月二三日～三一日）の江蘇代表は指派として茅祖權、劉雲昭、狄侃の三人、推選として朱李恂、張凌霄、顧子揚の三人が鄒魯の『中国国民党史稿』にのつている。「本会第一次選考軍官名冊」では江蘇代表狄侃が二人、劉雲昭が三人を紹介しているが（本誌五号の拙稿参照。いずれも合格しなかつた）、顧子揚の名はない。しかし王仲廉の回憶によれば、一全大会から帰つた顧子揚は、秘密厳守を条件に、徐州中学の学生郭劍鳴、銅山師範学校（顧子揚が校長を兼ねていた）の学生賈韞山、蔡敦仁、孫樹成の四人を推薦した。郭劍鳴は親友である王仲廉にだまつて上海―広州へと黄埔に投考するの忍びなかつたようだ。旧正月で田舎に帰つていた王のもとに（一九二四年二月一四日）、「仲廉、速来徐一敘」の電報があり、急ぎ翌一五日、中学に駆けつけ、郭の行方を訪ねると、上海に

試験を受けに行つたとしかわからない。顧校長にあって初めて黄埔投考の真相を知らされ、かつ、郭に電報を打たせたのも校長の指図であつたことを知つた。仲廉は翌一六日に紹介状をもらう約束をして学校に戻ると、校庭でたまたま親友の王敬久、王家修とあつた。仲廉は校長からくれぐれも秘密厳守を約束されたにもかかわらず、黄埔投考をこの二人の王に話してしまふ。二王は直ちに一緒に行くといひはり、困つた仲廉は校長の叱責を覚悟で、二人をともし再び校長宅を訪なうと、校長は快諾して紹介状を書くことを約束してくれた。

翌二月一六日早朝、三王は紹介状と一〇元の路銀をもらひ、そして上海に先行した郭らの宿泊住所、国民党本部への詳細な道順などを教わり、最後に、「試験日がすぎているようだと採用されないかも知れない、そのときはすぐ戻つてくるように」と忠告され（募集要綱によれば二月末までに広州に到着しなければならぬ）、午後四時、列車で徐州から上海に向つた。上海法租界の泰安大旅館で郭らと三王はようやく顔を合わせた（三王がこの上海という巨大な国際都市にいかにも驚いたかは詳述しない）。先着の四人は、すでに上海での考試に合格し、路銀三〇元をもらひ、あす広州に出発するところであつた。三人の王は、国民党本部に登録をすませ、待つこと数日、上海大学での考試の通知が来た。試験は第一時間目が国文、題目は「各々米学の志を述べよ」、二時間目は算術、三時間目は英文訳、名詞のあなうめなどであつた。数日後通知があり、合格は仲廉一人であつた。つまり上海では一応〆切期日を設けたが、遅れて来た学生も受付け、試験を課して広州に送つたようである。上海での応募者五百余名、合格者百三〇人という数字は従つて総累計数であつて五百余名を一堂に集めて行なつた訳ではなさそうである。⁽²⁾

徐州三王のうち、上海考試に合格したのは仲廉一人、しかも彼は上海に住む高小の友人（仲廉に建國軍贛軍司令の李明揚への紹介状を書いてくれた）宅で痛飲し、帰りの電車の中で大切な路銀三〇兩をすられてしまふ。途方に暮れ

た三王は、上海に住む徐州中学の舎監劉溪川に事情を話し、二〇元を都合してもらい（彼は自分の金時計を売ってお金を作った）、とも角、広州へ先行する郭らを追って悄然と上海を離れた。広州では軍校の指定する大同旅館で郭らと再び一緒になった。ここには上海から来た受験生で一杯だった。三王は贛軍の李明揚を訪ね、敬久と家修が上海で試験不合格であるにもかかわらず、はるか広州まで黄埔投考に来た事情を話し、結局、孫文あてに受験許可の特別請願状を出すことに決った。請願状は仲廉が書き、家修が手を入れた。この一文は彼らがいかなる動機、いかなる思想によって黄埔軍校に入ろうとしたかがよく伺われる。それは大略次のようであったと仲廉は回憶している。

私達は農家の子弟、父は耕して食い、母は織りて衣る。書囊を負うて徐州中学に学び、北洋軍閥が割拠専横して人民を圧迫し、官僚政客が利権を争奪して民は生を安んぜず、外、帝国主義の侵略を受けること終日なるを目睹す。古人云う「国家の興亡、匹夫に責あり」と。私達は千里を遠しとせず毅然と嚆に來り、革命の陣營に参加し、熱血を灑ぎ、頭顱を抛うつを惜まず、国家の独立を求め、人民の自由を奪取す云々と。

こう述べて黄埔受験を請願し、孫文から特別許可をもらい、二王は三月二七日広東高師での広州複試を受けられることになる。顧子揚の紹介した徐州の七人のうち複試にストレートで合格したものは王仲廉、王家修、蔡敦仁、補考で合格したものは郭劍鳴、賈韞山、孫樹成、一期に入れず程潜の講武学校（郭文儀のばあいを参照）に入學し、のち黄埔一期に編入された王敬久と、すべて結局黄埔一期生として卒業したのであった。（王家修は一九二四年一月棉湖戦で戦死、蔡敦仁は一九二九年湖北で戦死、王敬久は一九六四年六月台南市で病没）。

○孫元良（一九〇四）の場合^③

四川省華陽鼎大壩巷の人。六人兄弟の末子。祖父の代に紹興より四川に移り、按察司につかえる刑名専門の幕友で

あった。父孫廷榮も祖父を継ぎ、県の典史を歴任し、八〇余畝の土地を残して典史で終っている。しかし辛亥革命で当鋪（質屋）にあずけた家産を失い、土地も佃戸にかえすことになり家は傾むきはじめた。元良は一一歳まで私塾で四書五経をたたきこまれた。五四運動のとき、元良は成都聯合中学に在学中で、この運動、とくに「片手で孔家店を打ち倒した」呉虞、胡適、陳独秀らの反孔教の精神にいたく賛同し、五四の英雄の集う北京大学を受験するも合格せず、国立法政大学の政治学科に入学した。一九二二年のことである。元良は五四運動を、腐敗売国の北京政府への学生による反対運動から思想と文芸の革命へと深化していったものと見る。そして元良が北京に来た二二年頃は、時局は更に悪化、国家の前途は更に暗澹たるものであったと回想している。青年たちは様々な政治活動に身を投じていたが、元良はしばし青春彷徨、政治団体、学術的な会、同郷の会、遊戯具楽部、京劇研究会などと遍歴する。しかしそういったなかで、最も吸引力があったのが国民党と共産党であった。孫元良によれば、当時の一般学生たちは、共産党も国民党も、ともに社会の利益と進歩のために努力しているものだ、三民主義よろしい、共産主義もまたよろしい、いずれも社会のためだ、どっちに入っても間違いではない、国民党北京執行部の責任者は李大釗であるが、彼は共産党員でもあるではないかと大雑把に考えていたという。ただ、国民党は歴史が古く、知名度も高く、親戚朋友中にも国民党人がいて、国民党改組後はとりわけ青年の参加を喜んでいるという理由で国民党に入党する者が多かったという。

孫元良らとともに北京から黄埔軍校を受験し合格した者は、曾拯情（共産党の捕虜、一九五九年釈放、在大陸）、官全斌（不明）、楊麟（病没）、周惠元（不明）、耿沢生（第二次東征で戦死）ら六人の四川人と韓紹文（一九二六年南昌で戦死）、陳以仁（不明）の二人の江西人の八人であった。北京は北洋軍閥のひざもとであり、黄埔投考は敵に秘密でな

ければならない。しかも父母は当然反対するであろうから、家へも知らせられない。かくて孫元良らは、まったく自己の意志にもとずき、筆をすてて銃をとる道を選んだ。冬の衣服を売ったり質に入れたりして、上海までの路銀を確保し、国民党北京執行部の責任者李大釗の推薦状をもらい上海におもむく。元良は上海某学校での入試に参加した者数百人といい、湖南から上海に送られた郭一予も三月末に長江流域と長江以北の受験生の復試が行なわれたと述べているが、二月一六日、王仲廉らが上海に着いたとき、先に到着した郭劍鳴らはすでに合格通知をもらっていた。上海での選抜試験が受験生全部を一堂に集めて統一考査を行なったのではなく、数度に亘って入試を行ない広州に送ったと思われる所以である。元良の回憶は黄埔に投じた理由として、五四運動との連続性を強調している。反軍閥、反封建、中国亡国の危機こそ第一期黄埔投考生の共通の意識であったと思われる。

○鄧文儀（一九〇三）の場合⁽⁴⁾

湖南醴陵の人。父は「三家村の豆腐店」。二人の弟、二人の妹の長男。生活は豊かではなく、両親は長男の文儀が早く中学（醴陵の涿江中学）をおえ、結婚して村の小学校の教員にでもなり、家計を助けてくれることを願っていた。しかしこの長男の夢は、軍人となって革命を行うこと、旅行家となって世界を旅することであった。一九二三年、彼が中学在学中、広東の革命の空気が、孫文の連ソ容共策によって、蔣介石の訪ソ（一九二三年八月一六日―二月一五日）、M.バラディーンの渡華（一九二三年一〇月六日）と次第に過熱しつつあった。しかも湖南醴陵出身の程潜（日本の陸士六期卒、このとき孫文の軍政府の軍政部部長兼陸軍大臣）は、一九二三年一〇月、中央陸軍教導団を黄埔島に設け、革命精神に満ちた模範的軍隊を作りあげようとしていた。このニュースはいち早く故郷に伝わり、この教導団に醴陵の涿江中学の同級生も多数参加しようとしていた。文儀もその一人であった。「革命なら黄埔へ」

(要革命、到黃埔) が当時の青年の合い言葉であったという。

鄧文儀によれば湖南の青年たちが多数広州におもむいて軍人になろうと志したのは、次のような事情によるという。一つは、一九二二年、湖南を襲った大旱拔で、多数の餓死者を出し省外流出の現象を生みだした。もう一つは、醴陵の革命とロマンの歴史で、古くは唐の李靖義と紅拂のいわば英雄と美女の恋愛物語、民前の孫文の萍醴の役、そして変法に殉じた譚嗣同、特に揚度の作った「湖南少年歌」(その中に湖南をスペルタ、プロシヤにたとえ「若要中国亡、除非湖南人死滅」とある)、といった尚武の風潮である。

とまれ、一九二三年秋、涿江中学の鄧の同級生七人は、両親にも告げずひそかに旅費を作り、株萍鉄道に乗って長沙に至り、大砂洲や岳麓山に遊んだ。鄧はここでフランス勤工儉学帰りの叔祖父鄧崇魯を訪ねて意図を打ちあけたところ、意外にもこういわれたのである。「わが鄧家には読書人は大変すくない。お前は中学卒業を間近かにひかえ、進学するも就職するもいいが、兵隊になりに広東まで行くことはまかりならぬ」と、断乎広東行きに反対し、あまつさえ監視人までつけて阻止しようとしたのである。しかし鄧の決意は変らず、同級生たちと語らって監視をまき、船で武漢から上海を経て(彼らが上海の繁華に驚くのは王仲廉らと同じ)、広州に向った。そこで彼らは一全大会の開催、国共合作、そして黃埔軍校開設計画の話をきいた。彼らは、まず教導団で学兵になっておいて、黃埔軍校が出来たらそちらに移ろうということになり、教導団に入り、二等兵となった。この教導団には、醴陵出身の中学卒の学歴をもつ学生が全二百余名中に六〇名以上を占めていた。毎日、三操二講で大変きつく、食事は粗末、兵舎は破屋、小使い銭は毎月両毛しか支給してくれなかったと鄧はいう。

一九二四年二月、この教導団は講武学校と名を改め、黃埔島から移転するが、これと平行して黃埔軍校の募集が始

まった。文儀らはかねての計画通り、休暇をとって応募したが、丁度旧正月中（一九二四年二月五日が旧暦一月一日）であったため広州発黃埔島行き舟便がなく、二日おくれて戻ったところ逃亡兵とみなされ、ビンタ百と全營の便所掃除をやらされた。鄧はこの教導団・講武学校の軍事教育が「打罵教育」であったと強い不満をもらしている。黃埔を受験し講武学校をやめた鄧ら四人は、学校から逃亡兵とみなされ逮捕令が出された。三月二九日入試は広東高師で行なわれ、合格発表は四月二八日であった（広州での試験については後述）。この間逮捕令の出ている文儀らは虎門や広州市内に身をひそめ、ひたすら合格発表を待った。

鄧文儀と同じコースをたどったと思われる者に、のち共産党で名を挙げることになる周士第がいる。周士第（一九〇五）湖南長沙の人。文儀と同じく教導団・講武学校に入り、同じように逃亡兵とみなされ、黃埔に合格することによって新しい運命がひらけてきた例と思われる。周士第の回憶録は、おのれ自身を語ること少く、経歴、投考の動機など明らかではない。周恩來の影響下に共産党に入り、北伐の時は鉄軍・葉挺の独立団の參謀長、一九五五年には人民解放軍の大將となっている。

鄧文儀、周士第らが講武学校から黃埔第一期に転じた組であるとすると、鄭作民は武校にとどまり、のち武校の黃埔合併にともない、黃埔一期生として卒業した組である。孫元良の回憶に「第一期の卒業（一九二四年一月三〇日卒業）が迫ったころ、軍政部の作った『軍政部講武堂』の百数十名の学生を第一期第六隊とした。なぜ第五隊としなかったのか私には理由がわからなかった」（八一頁）とある。第一期の学生隊は第一から第四隊まで、続いて一九二四年八月一日から九月一日までにとった学生を第二期生（四四九人）とし、通し番号で第五隊とした。第六隊は、一九二四年十一月一九日に移行した講武学校の学生二二一名（この中の八名は下級幹部試験下第者、二一名は革命先烈的

子弟である、後述)中の一四六名を収め、残りの八五名を第一隊から第四隊に均等配分した(第四隊のみ二二名、あとは各隊二二名)。この武校からの移行組の中に共産党系に趙柵(補考で毛沢東を連絡先とした湖南の学生)、蔡升熙、左権、国民党系ではすでに述べた王仲廉の友、王敬久らがいる。ここではこの移行組の比較的経歴の明らかかな鄭作民をとりあげる。

○鄭作民(一九〇二〜四〇)の場合⁽⁷⁾

一九三九年九月、四川の軍次にみずからの簡潔な伝を書き残し、四〇年二月、崑崙関の役で戦死した。遺書ともいうべきこの自伝は偶然に発見された。私は民前一〇年(一九〇二)一〇月、湖南新田に生まれた。父は農業に従事し六七歳、母は七〇歳、兄三人、姉一人、弟二人、すべて結婚している。私にも男三人、娘一人の子供がある。私は初小、高小、県立師範を卒業。一九二三年冬、軍政部は広州で陸軍講武学校の開設を計画し、湖南で学生を募集した。私は試験に合格し武校〔一九二四年二月に開校〕に入校した。二四年一月武校は総理の令を受け、黄埔軍校に併入され、私も黄埔一期第六隊に学び、一九二五年春東征の役、淡水戦のあと卒業〔卒業式は二五年五月二〇日〕、陸軍大学一四期卒(一九三五年秋入学、三七年八月卒)と。〔鄭作民は黄埔を卒業して、教導第二団五連見習副排長をふりだしに、連長、営長、旅長と昇進し、一九三八年二月第九師々長、崑崙関の役では中将で没している。三八歳であった〕。

次には、その思想行動が共産党に近いもの、あるいは共党員であるものについて紹介しよう。

○丘飛龍(一八九九〜一九二五)の場合⁽⁸⁾

広東澄邁の人。一九二五年六月一日、討劉の戦いで戦死した。丘の伝記を書いたのは洪劍雄で(丘と同じ小学

校、高師そして黄埔一期の同学である)、「一九二五年六月二二日、軍校政治部にて」と前書きされている。

丘は私(洪劍雄)と同じ小学校の卒業生であるが、家貧しく、進学できなかった。しかし好學心やみがたく、國文專修館に入学。一九二二年八月、親戚の援助で、広東高等師範に入り、ここで私と再び一緒になり、同じ下宿にすみ、ますます親密となった。私と丘、さらに学友を加え、議論を闘わせたとき、私が「学生は革命に努力すべきだ」というと、丘はいった。「こういう二重の圧迫を受けている中国の政治状況下では、革命が妥当な場合と、むしろ不革命がよい場合があると思う。その場合、従容として人間となること〔従容做人〕、これがむつかしい点と思う」と。

丘飛龍のめざす、あくまでもヒューマンである革命とは、人間性回復の革命であろう。そのためには中国の革命の党に加入し、中国の人民がともに奮闘することによってのみ可能となろう。

丘は家計逼迫のため、ついに学業の継続が不可能となった。一九二四年一月、国民党が軍校を作るときき、ペンをすてて剣をとる決意をし、難関の入試を突破して晴れて黄埔一期に入った。「普通社会」から軍隊に入ることになり、「もし将来、私が兵を指揮できるようになったら、必ず社会のすべての悪人〔盜賊〕を殺し尽し、これまで受けてきた圧迫の苦しみに報復してやるのだ」と語ったという。卒業して少尉排長となり、一九二五年一月、東征のとき、彼は非常に興奮して、「ついに賊を殺す機会がやってきた」と喜んだ。淡水の激戦で彼は決死隊を志願して奮戦、左腕に銃弾を受けるも、脚絆でしばり右手の銃で戦って危機を脱し、食もなくて二日間歩き続け、ついに救出された。傷が癒えて中尉排長に昇り、討劉戦のとき、一九二五年六月一日午前一時、龍眼洞での戦いで腹部貫通銃創を受け、午後九時、同処で戦死した。二十六歳、父と継母健在、弟二人、妻と子供五人を残す。

洪劍雄の文の最後の一節は、司馬遷の、やがて毛沢東が引用することで有名になる一文をひきつつ次のように終っ

ている。

人、誰か死なざらん、死に泰山より重きあり、死に鴻毛より軽きあり、飛龍同志は死に泰山より重きありといふべし。同志たちよ、我々は死を怕れるものではない。我々は主義の実現を希望し、人類が自由平等の幸福を手に入れることを希望する。すでにたおれし同志の鮮血を踏みしめて一步一步猛進あるのみ。

この丘飛龍の伝を、血と涙で綴った洪劍雄もまた革命の途上で、その若い生命を奪われる。「黃埔血史」には雅林なる者の、洪の伝がある。

○洪劍雄（一九〇二—二六）の場合。

広東澄邁の人。広東代表譚平山の推薦による。辛亥革命がおきると、弁髪を切り、読書と青年運動に従う。高小、中学、広東高等師範に学ぶ。劍雄は常に「頭が痛いといって頭痛をなおし、足が痛いといって足のみを治療するのは、根本的な革命の謀^{はかりごと}ではない」と語っていたという。彼は革命的な軍事力による根本的な社会変革——これは陳独秀、譚平山、馮菊坡らの提唱する国民革命論の実行である——を考え、教師になる夢をすて、軍人になろうとして黃埔に投考した（このとき譚平山の影響指導があったものと思われる）。

周恩来が黃埔軍校の主任となったのが一九二四年一月、周は第一期生の優秀組の中から、王逸常、楊其綱、そしてこの洪劍雄らを政治部に入れて見習とし、政治部の再建にのりだした。その方針は、①新たに成立した教導第一團に党代表を派遣すること、②「青年軍人聯合会」を作り、「士兵之友」なる油印の壁新聞を出すこと、③政治部の政治工作制度を確立することの三点であった。このとき洪劍雄らに語った周恩来の談話は興味あるものである。それは一言でいえばソ連の赤軍にならった新たな軍事思想・技術の導入である。周恩来は語っている。「これまでの黃埔軍

校の政治部は空架子であった。学校にも真に進歩的な政治工作はなかった。君達も知っているように、蔣校長の執務室のドアの所には于右任の送った『登高望遠海、立馬定中原』なる対聯がかけてある。また、学生の許に配布されているのは蔣校長編の『曾（國藩）左（宗棠）治軍語録』である。こんなもので、一体どうして学生を訓練して真正の革命幹部になしえよう！今後我々は努力してこのような状況を改革し、この軍校にレーニンの創造した赤軍の経験をおし広めよう」と。

一九二五年七月一日、孫文なきあと、汪兆銘を主席とする国民政府が発足して軍政の統一がはかられ、七月三日、第一軍より第五軍までの国民革命軍が成立する。蔣介石が国民革命軍第一軍軍長となり、一師二師三師の三師を統轄した。この第一軍党代表は廖仲愷、廖が暗殺され（八月二〇日）てのち汪兆銘が兼任した。各軍に政治部が設けられ周恩来が第一軍政治部主任（第一師の党代表を兼任）となったとき、洪劍雄は周恩来の下で組織科長となった。第二次東征期には第一軍第二師の政治部主任となり、北伐のとき（一九二六年六月）、鄧演達が国民革命軍總司令部政治部（総政治部と簡稱した）主任（副主任は郭沫若）となったとき、洪劍雄はその宣伝部の科長となった。北伐軍が破竹無敵の進軍を続けて湖南に進攻したとき、湖南に疫病大いにおこり、洪劍雄はついに過労のためたおれ、不婦の人となった。郴州におかれた棺をその妻の張婉華が故郷に運びたいと總司令部に申請していたが、その後どうなったかは知らぬと洪の伝を書いた記者はのべ、筆をおいている。

丘飛龍、洪劍雄の場合、親友が戦死した友の伝を書き残して、その死をいたみ、その書き手もまた戦死して、血史の血脈が書き綴られ続けたまなけなケースとして注目に価する。さらに、二人とも国民革命の巨浪の中で、広東高等師範（のちの広東大学、今の中山大学の前身である）卒という高い学歴の青年が、いずれもペンをすてて剣をとり、反

軍閥の革命の為に若き生命を犠牲にしているのである。しかも、二人とも、その思想は国民党と共産党の思想のアマムルガムというより、むしろ、共産党のそれではないかと思われる。事実、洪劍雄は、譚平山が自信をもって紹介した唯一人の推薦者であった。

次に第一期生の中ではっきりと共産党系と目されていた曹淵の場合をみよう。

○曹淵（一九〇二～二六）の場合⁽¹⁰⁾

安徽寿県の人。蕪湖工読学校と職業学校卒業。一九二四年春、上海で黄埔に投じ、一期生となる。国民党一全大会での安徽代表（白文蔚ら五人）の紹介した二六名（うち三名合格）にこの曹淵の名はない。彼は別のルートで黄埔に投じたのである。彼の学んだ蕪湖工読学校（あるいは工読団とも）は共産党の高語罕らが創設したもので、曹と同郷の許継慎（共産党員、黄埔一期合格）もこの学校に学んでいることから、曹もともにこの学校・高語罕を通じて投考したものと思われる。「黄埔血史」にはこのときの一つのエピソードが残されている。曹が黄埔に投じようとする、級友たちは「文書生では軍隊中での労苦に耐えられまい」といって思いとどまらせようとすると、彼は「中国の革命は時代の要請である。薄弱の民衆を組織しても、徒手では敵に抵抗できない。まさに黄埔建児がその先鋒とならねばならない。私がここに来たのも、生命と自由を党国にささげ、帝国主義と軍閥の悪しき勢力を平定して民衆の大いなる期待にそい、私の天職を完成するためだ」と。東征に従い学生連の党代表、国民革命軍第一軍第一師第一団第八連連長、のち、第三師第九団第一營々長、一九二六年三月、老いた両親の手紙で休暇をとって故郷に帰り、北伐の時、葉挺の鉄軍・第四軍独立団第一營長に所属して大いに活躍した。汀四橋・賀勝橋の戦（一九二六年八月二五日～三一日）で戦功をあげ、九月五日武昌城の戦いで切りこみ隊を志願し、梯子を登って切りこんだそのとき、身に数弾を受

け、梯子の上から「革命万歳！」と叫んで壮烈な戦死をとげた。二四歳であった。

ところで黄震遐編『中共軍人誌』〔附録三 中共軍人早期学歴表〕（当代歴史研究所、香港、一九六八年）は、黄埔一期生として、王爾琢、成浩、盧徳銘、伍中豪、呉浩、白海風、徐向前、張際春、周士第、閻揆要、陳奇涵、陳賡、陳明仁の一三人をあげている。ソ連軍事顧問チェレパノフの回想録によれば、一期中の共産党員は三九人⁽¹⁾というから、この表はそのごく一部分にすぎない。しかも「本学第一期学生通訊表」、『黄埔軍校史料』などを照合してみると、成浩、呉浩、陳奇涵の名はなく、（別名、改名、変名の場合があるので断定できないが）、盧徳銘（四川宜賓）は二期、伍中豪（湖南来陽）は四期生となっている。すでに見た曹淵、洪劍雄は明らかに共産党員であり、以下にのべるように多くの著名な共産党員がこのリストからもれている。（最も著名なものは、入校時共産党員でなく、卒業後共産党員となった徐象謙（向前）のような場合である）。以下では共産党員で経歴の若干明らかなものを取りあげ、黄埔に投じた経緯をのべよう。

○徐向前（象謙）（一九〇二）の場合⁽¹²⁾

山西五台山の人。父は書店を経営、姉二人、兄一人、妹一人の四番目。父は保守的であったが、向前は家業の書籍から新しい知識を身につけた。高小を経て太原師範学校に入り、二一ヶ条反対運動では学生デモのリーダーとして街頭で演説もした。卒業後、壮志中学（閻錫山の創立）の付属小学校で教師となった（師範在学中に五台山の富紳・楊某の娘と結婚）。広州に孫文の革命政府ができて、向前は大きな期待をいだき、革命の中心・広州におもむかんとしたが、父の反対を恐れ、兄にのみ告げて広州に向った（N・ウェールズに語ったところによると「妻も黄埔に入学して、死んだ」という。徐の妻がいつ黄埔に入ったか不明である）。向前がいついかなるルートで広州入りしたか定か

ではない。「本会第一次選考軍官名冊」、「補考軍官学生姓名底冊」にも徐象謙の名はない。向前が共産党に入党するのは、一九二六年、鄧演達の影響によるともいうから、向前はこの一九二四年段階では国民党のルートを通じて広州入りを果たしたと思われる（黄埔を卒業したのちも、国民党にも共産党にも属さぬ中間派であったと自ら述べている）。徐向前がのち一九五五年人民解放軍の十大元帥の一人になるのは周知のことである。

曹淵の場合も徐向前の場合も、黄埔にいかなるルートで投考したか明らかではない。しかし、共産党は極めて明確な革命プログラムに従って優秀な学生を黄埔に送りこんだのであって、以下に述べるように、曹淵の場合がおそらくそうであり、徐向前の場合は、革命的、中間派が国民党から共産党へと転身した例なのである。というのも、黄埔軍校創立が日程にのぼってきたとき、「共青团広州地委報告（第七号）」は次のように指令しているからである。

現在、国民党は広州に軍官学校を創立しようとしている。各地区で三、四人の同志を派遣して投考させ、将来の軍人運動にそなえよ。⁽¹³⁾

この「将来の軍人運動」とは一体何を意味するのであろうか。彭述之は軍事行動と軍事運動を区別し、まず、軍事行動は組織と訓練を受けた群衆を武装させ旧統治階級を打倒して政権を奪取する武装暴動であると規定した。⁽¹⁴⁾そして革命戦略の三段階、民衆への啓蒙と宣伝が第一段階、組織と訓練の第二段階、そして最後の第三段階にこの軍事行動を位置づけた。述之のみるところ、孫文のこれまでの革命運動がすべて失敗に帰したのは、この第一、第二の段階を欠く単なる（一揆的）軍事行動に終始したからである。従って今こそ、この全三段階を視野に収めた「軍事運動」が必須なものとなる。同じように惲代英がこの「軍事運動」を農民工人への宣伝の一環としての軍隊への宣伝にとらえ、今、肝要なのは、むしろ、軍隊よりも農工への宣伝の浸透だと述べているのも、実は、彭述之と同じ観点、孫文の軍

事行動一本槍への深刻な反省から、むしろ、述之のいう第一、第二段階をとりわけ強調する視点に立っていることを示している。こう見てくれば、この広州地委の報告のいう「将来の軍人運動」は彭述之の第三段階つまり武装暴動による政権奪取をも含めた軍事運動全体を指すであらう。

黄埔軍校は、そもそもソ連の革命の経験に照しての国民革命遂行のための革命武力の創出にあり、中国の自由独立達成の国民革命の牽引車である。コミンテルンは、国共合作のブルジョア革命（レーニンはこの民族革命といいかえた）を経て、将来共産党によるプロレタリア革命へと至る革命路線を想定し、当面は国民党内における共産党の地位の強化を考えていた。⁽¹⁵⁾ ここにおいて孫文・国民党が総力をあげて創立しようとしている黄埔軍校こそ、国民革命の中心勢力になるはずであり、黄埔を掌握すれば、将来におけるプロレタリアートの革命は、革命遂行のための巨大な軍事力を掌握したことになる。張国燾が少し後に「黄埔中心主義」と呼ぶことになるが、まさに現在のブルジョア革命・民族革命の進行中に、将来の、プロレタリア革命の革命勢力をあるいは公然とあるいは秘密裡に、大量に育成しておかなくてはならぬ。黄埔の革命的學生軍こそ、将来のこの遠大な計画実行の担い手となる筈である（この「黄埔中心主義」の中心に政治部主任の周恩来がいた）。

この共産党が學生を黄埔に送りこんだ手順は、第五期生（一九二六年三月入学）三千人の學生を募集した場合であるが、「中国共産党通告第六十二号」（一九二五年一月一日）によれば、次のようであった。⁽¹⁷⁾

① 各級の党組織は、高小卒以上の學歷をもちさほど重要ではない任務についている黨員、共青团々員、国民党左派黨員を多数選び出し、その人数を中央に報告する。

② 中央ではこれを総計し、応募者が出発する前に、総定員数とにらみあわせ、可否を各級の党組織に連絡する。

③ 各投考者には国民党の紹介状を持たせ、

④ かつ共産党と共青团の黨員には各地委の特別紹介状を持たせ、共産党の広東区委（粵華路省署東楊家祠楊匏庵氣付）に、今月末までに出現させよ。

⑤ 目的は、黄埔軍校が反動派の根拠地にならないようにすることである。

第一期生の場合、共産党系の各省代表は国民党系と同じく、秘密裡に優れた学生を広州に送りこんだのであって、上記五期生のような全体的調整は、はかられなかったと見てよいが、共産党・社青团の組織を通じて人材を発掘し、これを推薦するという基本的パターンは不変であったとみてよい（国民党の場合も、改組によって共産党的なピラミッド型に組みかえられたので、同じようなルートをとることになった）。しかも、この国共合作の最初期において、両党間の矛盾はまだ尖鋭化せず、孫元良がいみじくも述べていたように、一般の青年は、両党ともに祖国のために共同奮闘するとみるナショナルな意識に強く規定されていたとみてよい。しかしながらそういったなかで、極めて明晰な階級意識を持った者もあり、蔣先雲はその典型といえる。

○蔣先雲（一九〇二～二七）の場合

湖南新田の人。湖南代表袁達時が紹介した一五人中の一人（合格者五人）。一九一七年心社を組織し、湖南革命組織の開端となる。李鋭によれば、「彼（蔣先雲）は衡陽第三師範の学生で、五四運動当時学生指導者だった。一九二二年毛沢東が衡陽に出むいて党を結成したとき、彼は最初に党に吸収され、ついで党から派遣されて安源で労働運動に従事した」。ついで一九二二年一〇月初から二三年一二月まで湖南水口山の労働運動に従い、水口山鉛・亜鉛鉱労働クラブ創立の準備主任となり、労働者をひきいて軍閥趙恒惕に対抗した。鄧中夏『中国職工運動簡史』では、水口山のス

トは「その雄壮は安源におとらず」といい、主持者は蔣先雲同志とのべている。「一九二三年二月末、水口山の第二回のストが趙恒惕によって武装弾圧されてから、広州にいつて黄埔軍官学校にはいった」と李銳は書いている。黄埔投考の詳細は不明であるが、長沙の区党委の選抜紹介、袁達時（国民党員）の紹介という、既に「共産党通告第六十二号」に述べた、国民党、共産党の二重紹介法で表むきは袁達時の紹介者としたのであろう。黄埔での「文武の才は全校中抜群だった」。蔣介石はしばしば高官をエサに共産党の党籍離脱をさせようとしたが、首を切られても共産党の党籍を離れる訳にはいかぬと断ったという。一九二七年五月二八日、国民革命軍第一一軍第二六師第七七団長として河南の前線で重傷を負い、三たびたおれ三たびたちて敵を追撃して戦死した。二五歳であった。

蔣先雲とならんで一期生中の最優秀組に、中山艦事件で名を知られることになる李之龍がいるが、知るところはすくない。

○李之龍（一八九九—一九二七）の場合⁽¹⁹⁾

第一期の「同学通訊表」では「李之龍二十五歳湖北沔陽」とあり、学生第二隊に属していた。青島海軍学校を卒業して、共産党に入り、一九二三年二月の京漢鉄道ストに参加し、バラディーンの通訳をつとめたこともあった。共産党の派遣で黄埔に入学した。黄埔を卒業して、普通、見習の少尉なのに、李之龍は（賀衷寒とともに）新にできた軍校広州城内分校の大尉秘書となった。これは一期卒業生の中でも最高の位であり、彼の経歴と学識が群をぬいていたものと国民党系の書物も述べている。孫元良は、李が黄埔に入学したとき三五歳ぐらいに見えたという（実際には二五歳）。しかも卒業してほぼ二年後、同じ一期生で大尉、少佐で最高位なのに、李之龍は戦功なく功績なく海軍の経験もなく（と孫は見た）、少将の海軍局長代理にまで昇進したと述べている。李自身の説明によれば、広東政府の海

軍局長はソ連顧問のスマルノフ (P. I. Smirnov) であったが帰国し、代って副局長の歐陽琳が代理をつとめたが密貿易事件に連坐して逃亡してしまった。そこで李が政治部主任ということもあって海軍局長代理となったのだという。李之龍は広東コンミューン (一九二七年一月) で張太雷らとともに戦死した。

そのほか幾つかの史料は第一期生の共産党員に言及している。周士第の回憶録には次のような人物がいる。姓名の次のカッコは、出身地と一九二四年黄埔投考時における年令である。

許継慎⁽²⁰⁾ (安徽六安、二三)、蕪湖第四中学卒。共産党員高語罕が安徽工読団を組織したとき参加して、共産党に入る。許は同郷六安の王逸常、楊溥泉らと共産党の紹介で黄埔に投じ、一期生となる。連長、団の党代表、参謀処の作戦科々長、葉挺の鉄軍の第二營々長となり、賀勝橋の激戦 (一九二六年八月) で負傷した。蔣先雲が戦死したあとを継いで、国民革命軍第一一軍第二六師第七七団々長となる。一九三〇年三月、紅軍第一軍々長となり、第二次国内戦争期に犠牲となったというが、許は一九三〇年一月のいわゆるA B団の名で、彭徳懐の第三軍団の紅軍第二〇軍の二、三千の將兵が朱徳・毛沢東に粛清されているが、そのいわゆる富田事件で殺されている。

趙自選 (湖南瀏陽、二二)、黄埔一期卒業後、周恩來の手びきで、周士第らとともに建国陸海軍大元帥府鉄甲車隊に編入された。第六期農民運動講習所で軍事総隊長、総教官をつとめた。「大革命失敗後、かつて中共広東省委員となり、のち犠牲となる」。

董仲明 (四川簡陽、二五)、孫元良のあげる四川同郷二〇名中に董の名がある。周士第、趙自選らと同じく、葉挺の国民革命軍第四軍独立団に編入され、營長、団長を経て、南昌起義に参加した。のち紅軍第二師々長となる。

胡煥文⁽²¹⁾ (湖南醴陵、二二)、第一期の同学通訊表に名がなく、第一期の学生第六隊にあること、醴陵の出身である

ことなどから、すでに述べた鄧文儀らと同じく、程潜の武校に入り、のち黄埔一期に編入された組であろう。一九二六年七月、湖南醴陵の役で、橋を要塞として陣どる敵の集中砲火をくぐって切りこみ隊長をつとめ、ついに対岸に渡りついたとき、喉部に銃弾を受けて戦死した。遺体は醴陵県城の近くに埋葬された。

劉明夏(湖北京山、一九)、黄埔投考の経緯不明。葉挺の独立団第七一団々長、のちには国民党についた⁽²²⁾という。しかし私の注意をひいたのは、「彼の父は辛亥革命の時に功績があつた」という一文である。黄埔の定員中に「本党の先烈遺族から二〇人」という特別枠が設けられていたことは知られているが、彼はこの二〇名中の一人であろうか、劉明夏の父とは、そもいかなる人物か、未詳である。

周士第の回憶録には、そのほか游歩仁(湖南宝慶、二〇)、陳賡(湖南湘鄉二都、二〇)がいる。游は一九二七年八月一日の南昌起義に国民革命軍第四軍第二五師の参謀処長として参加している。陳についてはE・スノーの伝記がある⁽²³⁾。地主の子弟で儒教古典を教えこまれるも、一三歳で家をとび出し、軍隊、粵漢鉄道の職員を遍歴し、社会主義青年団に加入した。鉄道をやめ、軍に復帰する決意をかため、たまたま程潜の講武堂に入学したが、抑圧感を覚え、黄埔に転じ一期生として入学、卒業して中尉となった。南昌起義に参加後、国民党につかまりあらゆる手をつくして転向を迫られるもこれを退け、脱走した。長征に参加し、一九五五年には人民解放軍の大將になっている。

王逸常のあげる一期中の共産黨員は、すでに紹介した蔣先雲、李之龍、洪劍雄、曹淵、游歩仁、許繼慎、陳賡のほか、劉仇西(湖南長沙靖巷、二二)、張其雄(湖北広済、二二)、楊其綱(直隸衡水、二三)、楊溥泉(安徽六安、二四)、王爾琢(湖南石門、一九)、唐同德(安徽合肥)、彭幹臣(安徽英山、二〇)、傅維銓(安徽英山、二〇)、張際春(湖南醴陵、二〇)、譚其鏡(広東羅定)、黄鰲(湖南臨澧、二〇)、徐象謙(向前)(山西五台、二四)そして王逸常(安

徽六安、二二五) 自身の二〇名である。

「社会新聞」には、伍中豪(湖南、四期)、陳毅(武漢分校の教官)が一期生に数えられているなどという明らかな誤認をのぞいて、すでにあげた蔣先雲、楊其綱、王逸常、許継慎、楊溥泉、黃鰲、張其雄、陳賡、劉仇西、劉明夏(鳴霞とある)のほか、新顔として黃綿輝(広西桂林)の一名の名がある。

『星火震原』に登場する一期生は比較的限制られた人物であり、徐向前、王爾琢、張際春、陳浩(陳皓 湖南祁陽、二六と同一人物か)、蔡升喜(蔡升熙、湖南醴陵と同一人物)ぐらいと思われる。

共産党人による黃埔軍校史に記載されている一期生はすでにみた李之龍、蔣先雲、許統慎、傅維銓、徐向前、陳賡、左權、陳啓科、黃鰲、楊其綱、張際春、劉仇西、唐同徳のほか、李漢藩(湖南東陽、二二二)、袁策夷(湖南)、劉雲(湖南)、譚鹿鳴(湖南來陽、二二二)、文起代(湖南)らであり、一期中の共産党員は八十数名という。チェレパノフのあげる数字のほほ倍であるが、根拠あつての数字であろうか。

包惠僧はその回想録中で一期生に言及している。⁽²⁶⁾ 共産党員として、蔣先雲、李之龍、楊其綱、李漢藩、傅維銓、徐向前、陳賡、許継慎、左權、陳啓科、黃鰲、袁策夷、劉雲、張際春、唐同徳、新顔として李默庵(湖南の人、一九二六年中山艦事件後離党)があげられている。なお賀衷寒(湖南岳陽、二三)は有能な社会主義青年団員で一九二一年にはイルクーツクの極東弱小民族会議にも出席、董必武の紹介で黄に埔投じたが、入学後は反共の闘士となつたとある。

『反共闘争経験談』(台北 一九七三年)には鄧文儀、蕭贊育(湖南邵陽、黃埔一期、中將)らが一期中の共産党員に言及している。李之龍、蔣先雲、梁幹喬(広東梅、二二二)、左權(湖南醴陵)、陳啓科(湖南長沙)、曹淵、曹と同郷

の孫以悰（安徽壽、二〇）がこれである。

以上、いくつかの記録を総合すれば、主要な第一期の共産党員は、蔣先雲、李之龍、洪劍雄、曹淵、許繼慎、趙自選、董仲明、胡煥文、劉明霞、游步仁、陳賡、劉仇西、張其雄、楊其綱、楊溥泉、王爾琢、唐同德、彭幹臣、傅維鈺、張際春、譚其鏡、黃鰲、徐象謙、王逸常、黃綿輝、蔡升熙、陳浩、梁幹喬、左權、陳啓科、孫以悰、周士第、李漢藩、袁策夷、劉雲、譚鹿鳴、文起代、唐際盛ら三八名であろうが、この第一次国共合作のナショナリズムの高揚期においては、多くの若き高学歴の獅子たちが、すでに北京大学のアンケートに見たように、いわば「左傾」し共産党に近い思想を持っていたのであり（丘飛龍のように）、これこそが、国民革命をともあれ「成功」させた（それ故、イデオロギーで左、右に分別することの不当性）大きな要因であったのである。

なお、黄埔入学の年令学歴制限として、一八歳から二五歳の高等小学校以上の者という条件（簡章の第三条）があった。我々は黄埔投考時（一九二四年二月現在）における年令を一応正確なものとしてみてきた（第一期の同学通訊表など）が、それが必ずしも絶対的なものではないことは、例えば、第三期生の孫孔文、ときに一六歳、兄の名前を使って合格したようなケースもあり（孔文は一九二六年九月、一八歳で戦死）、又、逆に、年令が二五歳をはるかに超えた者もあった。国民党の大物、胡宗南⁽²⁷⁾（一八九六年五月～一九六二年二月）が典型例で、補考の名表、同学通訊表では、「浙江、二五歳」となっているが、一九二四年二月の考埔投考時では、当時の中国の年令の数え方からすれば、二九歳にもなっている。胡宗南の父は浙江考豊縣鶴落溪村で薬屋を営む。宗南は県立の高小、公立興興中学（一九一二年～一五年）に学び、二〇歳から高小の国文・地理の教師を続けること八年、一九二三年一月、たまたま休暇をとって上海に出たとき、黄埔の募集を知り、同郷の軍人の紹介で上海の試験を受けて合格、一九二四年二月、日

本船嵩山丸で広州に向かっている（のち、一九二六年上校団長、一九二七年少將副師長、一九四五年上將、一九六二年台北にて病没）。

胡宗南は補考で合格した者であるが、年譜など見ても、そして他の補考合格者（冷欣がそうである）の回憶にもこの補考のことが出ていない。このときの受験者の名簿、「補考軍官学生姓名底冊（民国一三年）」（原件毛筆、中国国民党党史会所蔵）は興味あるものであるから次に掲げておこう。姓名、出身省、一九二四年二月段階での年令の順である。傍線と丸で囲んだ数字は合格した期の数である。全一四三名、一期合格者五九名、あとで一期に転入した者一人（趙栢）である。

黄維二一江西^①、羅英二五江西^②、龔益明二五湖北、蔣漢民一九安徽、許文騷二二安徽^②、李玉堂二四山東^①、李延年二二山東^①、李殿春二三山東^①、李振華二一山東、項伝遠二二山東^①、唐際盛湖北^①、李園二一浙江^①、王熙二〇浙江^②、冷欣二三江蘇^①、陳劍鳴二一江蘇、睦宗熙二〇江蘇、蔣超雄二一江蘇、胡炳坤二二江蘇、史宏焱一八江西^②、勳二三江西^③、徐国勳二〇江西、陳任之二二安徽、邱伯平一八安徽、蔡光華二二貴州^①、王大文二三広東、廖金材二五江蘇、劉釗二四江蘇、唐澍二四江蘇、張克寛二〇安徽、黄載光二一四川、章季高一九安徽、章炳泉一九安徽、王鍾二一山東^①、李子玉二四山東、李仙洲二二山東^①、何子雲二三山東、徐芝芳二二山東、刀步雲二五山東^①、李銑二一安徽^①、汪志青二五浙江、樊崧華二三浙江^①、鄭炳庚二三浙江^①、宣俠父二五浙江^①、周夢蓮二五浙江、陳潤廷二五浙江、石祖德二五浙江^①、許永相二五浙江^①、江世麟二五浙江^①、金曾煥二五浙江、俞墉二〇浙江^①、廖伝庚二四安徽、岳恩榮二四安徽、劉世藩二一安徽、孫雪筠二三安徽、廖運沢二二安徽、劉漢珍二一貴州^①、宋思一二五貴州^①、陳泰運二四貴州^①、馮士英二二四川^①、潘純緞二三四川、張渤二二江蘇^①、韓之万二三江蘇^①、張淦一九江蘇、

龐世覺一九江蘇、龐璋擘二一江蘇、周耀輝二一江蘇、馮鼎臣二五陝西、李紹白二三陝西、杜聿昌二四陝西、高致遠二二陝西^①、馮樹森一九陝西、劉鼎二一陝西、馬志超二二甘肅、方鎮二〇湖南、余広生二四湖南、周士冕二一江西^①、奚文元二二江蘇、郭竣森二四江蘇、任樸二二江蘇、蘇誠訓二二安徽、馬念燧二二湖北、宣鉄吾二五浙江^①、吳立峰二一湖北、曾為庶二〇湖北、曾勗二二湖北、胡宗南二五浙江、万田霖二四江西、王逸常二五安徽、徐宗堯二二安徽、李嶠二一江蘇、段重智二二安徽、傅維鈺二〇安徽、曹利生二〇四川、孫敦華二二湖北、吳興泗二一湖北、孫楚禱二二湖北、陳德法二三浙江、洪沢二五江蘇、洪潤二四江蘇、江霽一九安徽、邱元善二〇江蘇、郭冠英二四江西^①、來燕堂一九浙江、來学照二一浙江、趙柵二三湖南(毛沢東先生転)、周啓邦二三江蘇、何崑修一八安徽、凌昌策二三安徽、王天銳一八福建、陳宗亮一八江西、英辰陽二二湖南、趙鶴書二三江蘇、莊徳昌二五江蘇、伍文濤二二貴州、屠耀二四江蘇、何貴林二二陝西、尹思聰二二陝西、雷志昭二二陝西、何志超二一甘肅、朱祥雲二四陝西^①、金仁宣二二湖北、吳鴻業二一甘肅、徐会之二三湖北、張開銓二二湖北、呂虞臣一九山東、劉堂二一河南、劉明道一八河南、沈立之二五江蘇、鄭南生二〇四川、賈韞山二三江蘇、蔡敦仁二〇江蘇、孫樹成二二江蘇^①、郭劍鳴二一江蘇^①、陳和禧二一浙江、陳普舫二一浙江^①、呂禮二〇浙江、趙燮二二浙江、趙鎮強二〇浙江、趙馨二二浙江、馮劍飛二三貴州、田景福二二陝西、武威夏二二陝西

数寄な運命をたどる李仙洲、李玉堂、李延年の山東三李、蔣介石直系の高官として共産党の捕虜となって大陸に住む黄維⁽²⁹⁾、毛沢東を連絡先とした趙柵⁽³⁰⁾、徐州七士の中の数人、『中国青年』に追悼文ののる共産党員の唐際盛、同じく共産党員の王逸常の名がみえる。彼らは皆旅費三〇元を支給され、(一九二四年)二月から三月の間に、個々別々に上海から広州に向かい、四等船室で船酔いに苦しめられつつ、航行三日か四日で到着する。軍校で指定した大安、大同、

永同春の三つの旅館に、一と部屋に二、三人あるいは四、五人ずつ分宿させられ、ひたすら広州複試を待った。北方人は南方広州の言葉がわからず、三、四月とはいえ広州の猛暑に悩まされ、かつ、広州人の一日二食主義（朝一〇時、夕四時）には若き胃の府がおさまらず、夜ともなれば旅館前に出張してくるウドン屋ともすっかりなじみになったようである。⁽³²⁾

黄埔軍校の入学試験については、不明な点が多い。一つの推論として、本誌第五号で述べたように、まず北方の受験者を対象にして上海での考試（二月中下旬）、南方人を対象に広州での初試（三月二十九日）、この広州初試で定員割れが判明して、補考が急ぎ行なわれ（日時不明、北方人のみ受験）、さらに上海・広州の合格者を合わせての広州複試（日時不明）と広州での三度の試験を想定するものであった。⁽³³⁾ しかしながら、広州にて初試、補考、複試の三度の試験を想定する仮説は次の難点がある。すなわち、三月二十九日の広州初試とみられているものについては多くの記録が残されているが、補考とりわけ複試というより、重要な試験の記載が他の資料に全く見出されず、かつ幾つかの回想録は三月二十九日の試験を広州複試とみていること、⁽³⁴⁾ さらに、上海で合格した者が補考を受験していること、⁽³⁵⁾ つまり補考の前に北方人あるいは南北双方の人を対象にした試験が行なわれていて合格が決まっていなければならず、それは三月二十九日の広州初試ではあるまいかということである。とするなら三月二十九日の試験をいわゆる広州複試と見た方がよいではあるまいか。のみならず試験を行った当事者の王柏齡が、その回憶録中で広州で二度の試験が行なわれたと述べているのである。つまり、（上海初試―）広州複試―広州補考である。

この問題を解くもう一つの鍵は以上のほか一九二四年三月三〇日広州での試験の直後、廖仲愷が故郷にいる蔣介石にあてた電報にあるように思われる。それには、「粵考軍官学生千二百余人、除粵籍外湘桂贛閩滇等省数百人……」⁽³⁶⁾ つ

まり「広州にて士官と学生全千二百余人の試験を行った。広東のほか湖南、広西、江西、福建、雲南等の省から数百人」とある。この電報は三月二四日に軍官の、三月二七、八日（体格検査）、二九日（学科）に学生の試験を行なった事実をふまえている。新しく出来る学生軍の分隊長、副分隊長といった下級幹部に当てるべく、広東省警衛軍講武堂と西江講武堂出身の士官を推薦してもらい、三月二四日にこの試験を行なって五〇名採用した。³⁷⁾ 廖の電文の前半部は広州に集まった受験生の総数を伝えようとしているもので、その数は千二百余名だというのであり、電文の後半部は、そのうち学生の方の受験者は広東、湖南といった南部の省の者が「数百人」だというのである。数百人といえれば通常二、三百から五、六百人を指すであろうから、仮りに軍官受験者を二百人ほどとみても（下級幹部の募集は極めて困難で、むしろ百人前後と思われる）、なお残った学生「数百人」は一体どこの省の者であろうか。言うまでもなく北方の省の者であろう。北方での受験者数を挙げなかったのは、上海がその当事者であるから言及する必要はなかったのである。つまり三月二七―二九日の試験は、広州に集まった受験生すべてを一括して広東大学で挙行されたのであるまいか。上海では複試の話はなかったと学生が騒ぎ出したと冷欣が「黄埔生活回憶」で述べているのは、上海ですでに合格した者が広州で初めて受ける南方学生と一緒に複試を受けさせられることへの抗議であったと思われる。これに関する資料が十分でなく断定できないが、広州二回考試説もかなり有力なのである。

しかしなお、この説には強力な疑問点がある。それはなぜ定員割れが生じたか、補考はいつ行なわれたかという疑問である。前者については広州三回考試説で考えた上海との連絡不十分説³⁸⁾は成立しない。上海で何人採ろうと広州で一括して複試をやってしまうのであるから無関係なのである（廖は不合格者が多く出ること、旅費の支給額が大きくないと心配していた）。唯一の理由は王柏齡の挙げる「募集要項（定員数のことであろう）に合わせて嚴格に採用し

た(「照章敵格録取」)⁽³⁹⁾ ことにある。とするならこれは定員割れではなくて、『国軍政工史稿』も述べるように「受験者の教育水準が頗る高く、かつ革命心甚だ切実であったため、臨時に定員枠を寛げた」⁽⁴⁰⁾、つまり定員増ということになる。それでは定員三二四人、補欠三〇―一五〇人という定員枠はいつ増員が決まり、補考をいつ挙行したのであるか。定員増が最終的に決定されたのは、蔣介石の広州到着(四月二一日)以後のことではあるまいか。そして補考は四月二八日の合格発表のあと、五月五日と七日の一期生入校前に、補考とその発表が行なわれたとみるほかない。補考名冊の存在がその推察を裏づけてくれよう(しかしその名冊は北方人が主体であることは謎である)。

ともあれ、一九二四年四月二八日に合格発表があり、正取三五〇人、補欠一二〇人、計四七〇人が黄埔一期生となる、と権威ある文献が語っているが⁽⁴¹⁾、実はこの数字にも問題がある。というのも、一九二四年八月一七日、第一期学生甄別試験が行なわれ、合格者四四七人、退学者(含死亡者)一九人、留校察看者二三人とあり、これを加えると一九二四年八月一七日時点で一期生数は四九九名となり、四七〇人説を二九人上回る。しかも、一九二四年五月二〇日、校長蔣介石の訓詞の中に、学生四九九人といひ、六月九日の訓詞には、学生五〇〇人という。これは四九九人をそう呼んだものと考えられ、開学間もない五月二〇日段階(学生の入校は五月五日と七日)で学生は四九九人在校していたことになる。しからば四七〇人説の来源は一体どこにあるのであろうか。そういえば、権威ある記事の中で正取三七〇人、補欠一二〇人という数字のうち、補欠百余名という資料もあり、一四〇余名という説もあった⁽⁴²⁾。補欠の枠を二九人広げることで、四九九名となったと考えるのがもっとも妥当であろう。『黄埔建军三十年概述』は五月上旬入校時の学生数をはっきりと四九九人としている。

五月七日の学生入校時、四七〇名か四九九名かという謎は、下級幹部の試験結果と学生募集要項中の「本党先烈遺

族二〇名」の採用にかかわるのではあるまいか。後に一寸言及するであろうが、下級幹部複試受験者五〇名中（一期考試と双方かけ、一期の方に合格して一期生となった者一五名あり）、蒋介石のいう「学力不足」で一期に編入された者が八名あり、これと「本党先烈遺族二〇名」とが、補欠二九名増の秘密ではあるまいか。入校時、正取三五〇名、補欠一四九名、計四九九名が一期生の総数にはかならないのである。

この学生たちを収容する校舎は、黄埔島にある広東陸軍学校と広東海軍学校の校舎を修理した。校舎はすぐる一九二二年七月九日、一〇日の陳炯明軍の砲撃にあい、屋根は大破し、垣根は倒れ、瓦は四散していた。この修理は一九二四年四月中旬には完全に終り、四月二五日には、準備処の各長官、管理部、軍需部など続々とこの新校舎に移転を開始した。経費不足に「ヒステリー」をおこして故郷（浙江奉化）に帰っていた蒋介石も、二四年四月二一日には広州に戻った。すでに軍校建設の経費は、廖仲愷があらゆる努力を払って、雲南・広西軍閥から集めた。軍校設立時におけるソ連の経済援助はなかった。廖の妻、何香凝は廖のこの労苦の一端を伝えるエピソードを残している。

黄埔軍校創立当初のことを思いおこせば、廖先生は毎晩二時三時に帰宅するのです。私が、どうしてこんなにおそくなるのと尋ねますと、先生は、私は非常に苦しいめ、ひどい目にあっている。毎夜毎夜楊希閔（雲南軍閥の総司令）や劉震寰（広西軍閥の総司令）に会いにいき、彼らがアヘンを吸い終るのを待って、やっとのことで借款の話をきりだし、黄埔学校を作ったのだと。

広州の革命政権は西南軍閥の武力によつて辛うじて成り立ち、広東省は彼らの制圧下にあった。黄埔建軍期に広東に駐在した佐々木到一陸軍中佐は軍閥を「個人的私兵を以て形る」、「中央政府に服せざる所の武力集団」と定義している。中国近代軍閥の祖型として曾國藩、李鴻章があげられ、袁世凱及びその麾下の大小の將軍たちがその後継者と

してあげられるように、元來、軍閥は清代の總督・巡撫の後身であり、一省（もしくは教省）の民政、軍政、財政権のすべてを掌握する地方の最高支配者であった。それが、民国に入り、ストロンダマン・袁世凱の没後、中央・国家―これも腐敗せる政權であった―への忠誠心を放擲して、専ら各地方に拠つて私的目的を追求する武力集団になりさがり、外は列強、内は各軍閥と離散集合をくり返したのである。孫文の革命政權をその最初期において支えたのも、このような軍閥であった。軍閥はその軍事力による。軍事力はその兵力による。従つて各軍閥はその生命ともいうべき兵私を養うために、苛税の限りを尽くし、「占領地を軍事占拠するように奪い尽くせるものはすべて奪い尽くした」⁽⁴⁹⁾。広州市の広大な後背地は、こういった雲南・広西兩軍閥が支配し、孫文の革命政權はわずかに広州市内にその支配權を持つにすぎなかった。しかも革命政權を維持するために、人民とりわけ商人層に重税を課し、広州市は慢性的な物価高に悩まされた。孫文の革命政權も民衆から見れば、やはり一つの新興革命「軍閥」だったのである。ともあれ廖仲愷はこの旧軍閥から軍校設立費（すべて含めて一八万六千元）のほとんどをもぎとつた。設立の過程を良く知っている王柏齡は「資金調達はすべて彼（廖）の手になるもの」と回想している。

さて蔣介石は一九二四年四月二六日、さっそく新しい軍校の官舎に入り、この日、黄埔にて複試を受ける下級幹部五〇名を前にして、午後七時、第一回の訓詞、ついで三〇日まで連続四回の訓詞を行った。⁽⁵⁰⁾ 蔣の黄埔軍校での第一声として注目にあたしいしやう。

第一回の訓詞で、軍校創立の目的は国民党の勢力を拡大し三民主義を實行して中国を眞の独立国家たらしめるその幹部の人材を養成するにあること、そもそも諸君ら下級幹部はこの学校の基礎であり、諸君は党のため国家のために本校、本党の規律を守り、かつ、自己の生命・財産・安樂といったものすべてを「犠牲」にしなければならぬと説い

た。第二回目（四月二七日午後七時から）では、国民党員としての本分を尽くし、党という組織があたかも一人の間であるかの如く心を合わせて行動せよ。さらに本校では党律のほか軍紀にも従わねばならぬ。党規と軍紀の双方に従わねばならぬ諸君の任務は重い。「外国人の圧迫を脱し、中国を真の独立国家とするために」真の黨員たれ。そして間もなく入学してくる学生たちの良き手本たれと要求した。第三回（四月二八日午後七時）は、諸君が三〇万人の黨員の、四億の民の手本となること、「鞠躬尽瘁、死而後已」（諸葛孔明、後出師長）の精神を持って。これまでの革命が成功しなかったのは、「升官发财」の悪しき精神のためである。諸君は各人の責任、義務、本分を尽くせ、党ともにも生死せよ、ワシントン、レーニン（ノ）の成功の陰には無数の無名の英雄がいた、諸君はこの無名の英雄となれと叱咤した。第四回（三〇日）は、党も軍校においても、いずれも感情の融合、互助の精神が必要なることを説き、考試は全部終了したこと（二七日〜二九日まで）、発表は今日の午後四時なること、五〇名中、一、二人は身体過弱のため下第、数人は学力不足のため学生隊に編入させると予告した。

校長蔣介石の、この四回の演説の基調は、犠牲、規律、服従、本分といった革命的軍人黨員の徳目の強調とその上部概念として中国の自由独立というナショナルな目的が蔽存する。中国の国家的自立達成のために、今、我々は何をなすべきか。それは死をおそれぬナショナルな意識の創出にあるというのである。黄埔軍校の校長としての蔣介石の第一声は、かくて五四運動以後の中国の与論と歩調を合わせるナショナルリストのそれとして立ち現れた。外、中国の独立・主権の回復、内、革命政府の政権奪取、この運動を陳独秀らは「国民革命」と呼んだが、黄埔軍校こそこの偉業を遂行する牽引車とならねばならぬ。ただ、蔣介石はこの「国民革命」なる言葉を、この四回の講演中に一度も用いていない。後にも述べようが、蔣介石が期待するのは、黄埔健児による民衆の指導というエリート主義に立つ。国

民なる概念は彼のエリート主義の本質的部分を形成するものではなかったと思われる。

とまれ、すでに四月二八日に学生たちの合格発表があり、ついで四月三〇日に下級幹部の合格発表があり、教職員名録などで確認できるその合格者一四名、正規の一期生となった者一五名、「学問やや足らず学生隊にひき渡され」た者八名、この八名が一期に編入され、先烈の子弟二一名と合わせて、結局四九九名が合格した。

註 (1) 一九六〇年一月、陸軍中將で退役し、行政院の顧問となる。一九七八年『征塵回憶』を著す。以上の記述はその第一、第二巻に拠る。

(2) 上海での学生選別には毛沢東もいささか関与したようである。一全大会で候補委員となった毛沢東は、孫文が彼を廣州に留めて仕事させようとするのを振りきって、おそらく一九二四年二月七日には上海に発っている(『現代史料』第一集、一九三五年)。上海執行部の常務委員は汪精衛(代りに戴伝賢)、葉楚傖、邵元冲であり、戴の地位が最も高かったが実権は葉がもっていた。葉は毛沢東(組織部秘書)、惲代英(宣伝部秘書)、沈沢民といった共産党員を嫌い、ことごとくに排斥しようとした。特に毛は候補委員で普通の職員なみに扱えない。「毛も自らを甚だ高しとみ、事ごとに力争し、いささかも譲らない」。そこで葉はあらゆる手を使って毛追出しにかかった。一九二四年一二月初、毛は病氣休養の名目で故郷に帰ってしまう。葉はこの夜毛追出成功の祝賀パーティを開いたという(『現代史料』第一集、九二頁)。一全大会出席した湖南代表はそれぞれ得意の学生を紹介したが、「本会第一次選挙軍官名冊」のうちに毛の名はない。しかし郭一予の回想(『黄埔軍校史料』広東人民出版社、一九八二年、三七頁)によれば、一全大会から長沙に戻った何叔衡は、既に長沙に設立されていた平民学校、工人夜校の同志たちに黄埔一期生募集の話をもちかけた。郭は湖南第一師範を卒業して平民学校、工人夜校を手伝っていた。一九二四年三月、郭は清水塘で国文の試験「試述投考埔軍校の志願」を書きあげ(他の科目なし)、何同志の合格証や旅費をもらい、上海で毛沢東にあった。毛は郭によれば「上海での復試の受験者数が大変多いので試験をやることになった。早くその準備をするように」と忠告したという。

(3) 孫元良は一九三二年二月二〇日から三月一日までの廟行鎮の役で、第八十七師の第二五九旅をひきい、久留米第二十混成旅団、金沢第九師団と戦い大勝利をえ、これによって第八十八師の中將師長に特昇している(一九五四年時点で現

役中將)。以下の記述は『孫元良回憶錄 億萬光年中の一瞬』(台北、一九七二年)による。

(4) 鄧文儀は黃埔卒業後モスコウ中山大学に学び、帰国して軍校政治部副主任(第五期生)となっている。以下の記述は『黃埔學習之回憶』(会声月報三一八(一九四四年六月)、「投黃埔記」(伝記文学一六一六(一九七〇年六月))による。最近の著書に『黃埔精神』(黎明文化事業股份有限公司、一九七六年)があり、黃埔軍校の簡要な歴史がのべてある。

(5) 周士第『周士第回憶錄』北京人民出版社、一九七九年。

(6) 『中央陸軍軍官学校史稿』(綵装本、一九三六年版、以下これを『史稿』と略称する)第二冊六頁には、第六隊は一九二四年九月一日に川省の学生二〇余名と、一月一九日に移行した武校の一五八名よりなるとする。しかし川籍の学生は第一期で全二一名、孫元良の場合に見たように、彼らは既に四月の広州複試の段階から参加している。九月に遅れて二〇余名が加わった事実はあるまい。又『史稿』は移行組を一五八名とし、第六隊としたというが、第六隊は全員で一四六名であり、中国共産党側の單異之「黃埔建軍」(『文史資料選輯』第三輯、一九六〇年)はこの一四六名を以て移行の人数としている。毛思誠『民国十五年以前之蒋介石先生』(香港龍門書店一九六五年、三三五頁)でも一五八名としているが、一四六、一五八双方の数字に疑問がある。今、第一期の同学通訊表(四六二名)と『黃埔軍校史料』による一〇六隊の人数を対照させると次のようになる。B列は通訊表には載っていない人の数、つまり正取補欠以外で採った学生数で、武校からの移転組と思われる。但しのちに述べるように、下級幹部の試験からまわされてきた八名の学生がいるから、(B列の八五名プラス第6隊一四六名の)全二二一名から(八名プラス先烈の子弟二一名の)全二九名をひいた二〇二名が武校からの移転組であろう。

	A	B
1	126	21
2	122	21
3	124	21
4	116	22
6	146	
第隊第隊第隊第隊第隊		

(7) 『会声月報』二一一(一九四一年二月)

(8) 『黃埔血史』中央陸軍軍官学校追悼北伐陣亡將士特刊、民国一七年(一九二八年のものと思われる)に、烈士の略伝がある。

(9) 『黃埔軍校史料』(廣東革命歷史博物館編、廣東人民出版社、一九八二年、一八〇頁)、『包惠僧回憶錄』北京人民出版社、一九八三年、一五二頁も参照、人名に出入あり。なお引用文中『曾左治軍語錄』とあるは『曾胡治兵語錄』のことで

あろう。王逸常の記憶違いである。毛思誠前掲書、三二八頁参照。

- (10) 曹淵の伝は前掲「黄埔血史」、「社会新聞」九一七、『周士第回憶録』、『校史』の先烈の伝の三七などにより構成した。
- (11) A. I. Cherepanov, *As Military Adviser in China*, Progress Publishers, Moscow, 1982, p. 83. 一期中の共産党員数は中国共産党側では八〇数名という数字が常識化されているようである。『周總理青少年時代』(四川人民出版社、一九七九年)、覃異之「黄埔建軍」(『文史資料選輯』第二輯、一九六〇年)など。また張國燾『我的回憶』、香港明報月刊出版社、一九七三年、四五〇頁も八十余人という。

(12) Nym Wales『中国老一輩革命家』江山碧訳、香港万源圖書公司、一九七八年。

- (13) 『黄埔軍校史料』(既出)、三三頁。広州の社会主義青年団は一九二〇年二月末に成立した(上海社会主義青年団が最も早く、一九二〇年八月)。Chinese Socialist Youth CorpsすなわちSYと簡称した。このSYが中国共産主義青年団CYと改められるのが一九二五年一月二六日―三〇日の上海での第三次全国代表大会である(王章陵、『中国共産主義青年団史論』一九七三年、九八頁)から、『黄埔軍校史料』が社青団ではなく共青団としているのは正確を欠く。

(14) 彭述之「我們為什麼反對国民党之軍事行動」『嚮導週報第八五期(一九二四年一〇月一日)」。惲代英「軍事運動問題」(通信)『中国青年第五四期(一九二四年一月二二日)』。「中国青年」ではこの軍事運動をどうとらえるかで、継続的な誌上討論が行なわれている。六〇期、六一期など。

(15) ロバート・C・ノース『モスクワと中国共産党』現代史研究会訳、恒文社、一九七四年、三八―四〇頁。

(16) 張國燾『我的回憶』(既出)、四五〇頁、司馬長風『周恩来評伝』竹内実訳、太平出版社、一九七五年、八三―九〇頁。

(17) 『黄埔軍校史料』(既出)、七〇頁。

(18) 蔣先雲については、李銳『毛沢東その青年時代』玉川信明他訳、至誠堂、一九六六年。鄧中夏『中国職工運動簡史』、『嚮導』一九八号(一九二七年六月一五日)などに拠る。なお『周士第回憶録』(一一三頁)によれば、蔣先雲は毛沢東が推薦したことになっているが、このとき毛は広州から上海に直行したのであるからこの可能性はすくないのではあるまいか。

(19) 李之龍に関しては、吳相湘『民国百人伝』伝記文学出版社、第四冊、二五八頁、『包惠僧回憶録』人民出版社、一九八三年、一九六頁、『孫元良回憶録』八一頁、司馬路『中央党史暨文献選萃 第一次国共合作』自聯出版社、一九七五年、

二八四頁、「中央日報」(上海)一九二八年三月九日の広州特約通訊「槍斃大批共匪」の記事、「現代史料」などによる。

(20) 「社会新聞」九一七(一九三四年二月)。をみよ。

(21) 『陸軍軍官学校史』第八編、第一期革命先烈の略伝の三二を見よ。

(22) 『孫元良回憶録』(既出)、二三七頁。一九四五年一〇月、劉明夏は孫元良の下で縦隊長についている。

(23) E・スノー『中共雜記』小野田耕三郎訳、未來社、一九六四年。

(24) 『黄埔軍校史料』(既出)、一一六頁。このうちその経歴の一部が判明する者は、劉仇西、共産党中の活動分子という。第一次東征の棉湖の激戦で左腕を鋸去し、一九三四年国民党と浙贛辺境に戦い右腕を失い「無臂將軍」となり、終に浙江で国民党軍につかまったという(『社会新聞』一〇一七(一九三五年三月一日))。

張其雄は一九二七年二月漢口にて陣亡(『校史』先烈の伝の六二を見よ)。

唐同徳は江西講武堂卒、黄埔の下級幹部の入試で学力やや落つといわれて、黄埔一期に編入された八人の一人。第二次東征で戦死す(『校史』先烈伝の二二、および『包惠僧回憶録』一九二頁)。

王爾琢、一九二八年六月戦死。

楊其綱、周恩来の許で黄埔共産党支部の組織部で活躍、一九二七年四月一日、広州清党で熊雄、蕭楚女らとともに殺される(『社会新聞』一〇一七)。

張際春は一九四八年二月、劉伯承軍の政治部主任。

(25) 覃異之「黄埔建軍」(『文史資料選輯』第二輯、一九六〇年)が一番詳細。

文起代、湖南益陽の人、一九二五年六月二三日、沙基で陣亡(『校史』先烈の伝の一五)。

譚鹿鳴、一九二九年二月、広東惠州で陣亡(『校史』先烈伝の九九)。

(26) 『包惠僧回憶録』、一五四、一五八、一九二、一九六、二三四頁など。

(27) 『胡上将宗南年譜』台湾商務印書館、一九八〇年。

(28) 「山東三季」については、郭桐『国共風雲名人録』広角鏡出版社、一九七六年、七三頁以下。李仙洲は一九四七年、国民党第二綏靖区中将副司令官として山東にて解放军の捕虜となる。一九六〇年特赦され、故郷山東の政協秘書処に勤務。一九七三年新聞記者が訪問したとき、なおいたく健康で、眼鏡も杖もいらぬ。一子あり教師をしながら父母を世話

し、その晩年は安楽であつた。

李延年は淮海戦のとき第六兵团中将司令官なるも全軍壊滅、さらに一九四九年京滬杭警備副司令となるも解放軍に敗れ、金門島に敗退。台北に召還され、「擅自撤退」との罪で、一二年の長期徒刑の判決うく。後釈放されるも、一九六九年香港の一新聞記者が訪れたとき台北郊外で極貧の生活を送っていたという。

李玉堂は淮海戦敗退後、海南島防衛第一路軍中将総司令となるも、一九五〇年春、海南島解放のとき香港にのがれる。蔣介石の召還を受け台北に戻ると、夫人とともにスパイ容疑で銃殺された。刑場に引き出されたとき、泣きわめく夫人に向つて「山東人は懦弱ではない、泣くな」としかり、従容と刑場の露と消えたという。

(29) 黄維は蔣介石―陳誠とつらなる直系のトラの子部隊で、彼の率いる第一二兵团(一二万人、彼はその中将司令官)は米国貸与の兵器で最も良く装備されていた。一九四八年二月淮海戦で全軍覆滅、全員捕虜となつた。彼は一九七五年三月釈放さる。一緒に釈放された黄埔一期生として、もと国民党徐州剿総弁公室中将郭一予がいる。なおこの一九七五年三月の第七次戦犯釈放で、共産党は国民党人を一人も殺すことなく全員釈放している。第一次から第六次戦犯釈放中の黄埔一期生は次の如し。

一九五九年一月第一次戦犯釈放(肩書は捕虜時のもの)

杜聿明 東北保安長官司令部中将司令

曾拯情 四川省党部主任委員

宋希濂 川鄂綏靖公署中将主任

周振強 浙西師管区中将司令

一九六〇年一〇月第二次戦犯釈放

李仙洲 第二綏靖区中将副司令

范漢傑 東北剿総中将副司令

第三次、第四次、第五次には一期生いず、第六次(一九六六年四月)に楊光鈺第三軍中将副軍長がいる。以上、前掲『国共風雲名人録』、辛明『中共釈俘の米龍去脈』七十年代雜誌社、一九七六年による。

(30) 趙杓は試験に合格せず、程潜の講武学校に入り、その黄埔軍校への併合によって黄埔一期生となつたと思われる。な

お竹内表「現代中国への視角」(上下)、思想、一九七七年五、六月号)も参照。

(31) 「中国青年」二二六号。唐(湖北の人)は一九二六年六月一日広州市の病院で肺病のため死亡。武昌の中学のとき、一九一九年の五四運動に参加、革命思想を受け入れ校外で愛国運動を实践。一九二一年農村で耕読の小学校を独力で開き、二二年共産党及び共産主義青年団に入る。二四年黄埔に入學、過労病欠で中途退學(と思われる、第一期の同学通訊表には名前のみあり、貫籍年令、なし)、二五年には河南で国民党工作、二六年国民革命軍第六軍政治部党務科長となるも、肺病のため広州に来て斃れた。

(32) 冷欣「黄埔生活追憶」自由談一五十三、一九六四年三月。

(33) 袁守謙・黄杰『黄埔建軍』中央文物出版社、一九七一年、二一頁には「三月二十七日、假広東高等師範学校舉行入學考試、隨後上海考取的學生到達広州、復併広州初試取録學生舉行復試、四月二十八日考試成績揭曉、録取正取生三百五十名、備取生一百余名」とある。呂芳上「總統蔣公与黄埔軍校的創建」國立台灣師範大學歷史學報、第四号、一九七六年四月も同じ見解で広州初試(三月二七—二九日)↓(補考?)↓広州復試なるも補考と復試の日付不明である。

(34) 王仲廉『征塵回憶』(一六頁)には「三月廿七日、借広州高等師範学校為考場、舉行入學覆試：四月二八日覆試結果揭曉」。冷欣も「黄埔生活追憶」で復試は広東高師という。日付ははっきりしないが文脈から三月末とわかる。

(35) すでに見た「補考軍官學生姓名底冊」には、賈、蔡、孫、郭の徐州七士の四人の名がある。彼らは上海で試験に合格し、一九二四年二月一八日に広州に向けて出発している。

(36) 『廖仲愷集』北京中華書局、一九六三年、二二—二頁。この電報はそのほか受験生の三分の一が中学、専門学校卒の高學歷なること、試験科目(国文、算術、三角、幾何、代数)、体格検査(二七、八日)、試験(二九日)全題満点の者もすくなからず、定員少なすぎて去取甚だ難と。上海では一三〇名の外、更に七〇名とったというが、本当たるとすると広州での複試「到粵複試」不合格者が多くなろうし、旅費の支給額も多くなろう、斟酌するようにと述べている。

(37) 『黄埔軍校史料』(既出)、三五頁。

(38) 「筑波法政」第五号の拙稿参照。

(39) 王柏齡「黄埔軍校開創之回憶」(一) 伝記文学、一五一—六、八七頁参照。

(40) 『国軍政工史稿』上、國防部總政治部編印、一九六〇年、四四頁。

黄埔軍校の創立(続)

- (41) 『国軍政工史稿』上は正取三五〇名、補欠百余名(四五頁)とも凡一二〇名(四六頁)ともいい、『中央陸軍軍官学校史稿』第二冊(一頁)では正取三五〇名、補欠一二〇名、計四七〇名とし、『陸軍軍官学校史』もこれを踏襲している。但し『黄埔建軍三十年概述』(黄埔出版社、一九五四年、五頁)は四九九名としている。
- (42) 一期生の『同学通訊表』には全四六三名の姓名、年令、本籍が書かれているが名前だけの者が一九名あり、これは八月一七日時点の退学者に当らう。この一九名中に死亡者(毛宜、吳秉礼)が二名あり、八月四日に追悼式が行なわれている(毛思誠『民国一五年以前之蔣介石先生』二九八頁)。その他、家の都合でやめた張澣(王仲廉の友、下級幹部に合格した郭景、校長におこられ営倉に入れられ退学してしまつた張汝縉、病氣休学した唐際盛らがこれである。
- (43) 『黄埔建軍』(二一頁)は百余名といひ、鄧文儀『黄埔精神』(既出、六七頁)は一四〇余名、全四九九名という。
- (44) 下級幹部復試の合格発表は、一期生の合格発表(四月二八日)より二日あと、四月三日であった。学力不足で黄埔一期生にまわされた八名は張慎階(広東)、鄭燕飛(広東)、范振亜(江西)、楊步飛(浙江)、唐同徳(安徽)、馮聖法(浙江)、曾照鏡(広東)、雷徳(江西)である。『黄埔軍校史料』三五頁を参照。
- (45) これに該当する二〇名は、まったく確認できなかった。葉彥龍(湖南醴陵)は通訊表になく、第一期同学姓名籍貫表にあること、その出身地から武校からの移転組であらう。一九二五年二月、淡水の激戦で切り込み隊長をつとめ、ついに奮戦中に敵弾に当って戦死した。二一歳であった。注目すべきは、彼の父葉嵩繁は一九二〇年長沙で戦死した革命の先烈であるという(『陸軍軍官学校史』黄埔先烈の伝の四参照)。してみると、彼の場合、武校から移転したのではなくて、この二〇名の中に含まれるのかも知れない。
- (46) 陳炯明(一八七七一—一九三三)は広州モンロー主義をとなえて孫文の中国革命論に反対し、反乱を起した。一九二二年六月一六日から、孫文は永豐艦のちの中山艦や黄埔島などに拠り抵抗するも、ついに八月九日香港にのがれ、一四日上海に到着、ここでマーリンに逢い孫ソ提携の具体化がはじまるのである。
- (47) 『国軍政工史稿』上、八三頁。
- (48) 陸軍歩兵中佐佐々木到一『南方革命勢力の実相と其の批判』北京、極東新聞社、一九二七年、一四一頁。波多野善大『中国近代軍閥の研究』河出書房新社、一九七三年、第一章をみよ。
- (49) J・スペンス『中国を変えた西洋人顧問』三石善吉訳、講談社、一九七五年、二〇六頁。

(50) 以上蒋介石の訓詞はすべて国民革命軍中央軍政学校編『黄埔叢書』(一九二七年六月)第一集『精神教育』に収されている。

七 訓練開始

一九二四年五月五日、第一期正取の学生三五〇名が入校して、三隊に分けられた。五月七日、補欠の学生一四九名が入学し、第四隊と名付けた。第一隊々長呂夢熊上尉(大尉)(湖南人、雲南講武堂卒)は蒋介石の紹介、第二隊々長茅廷楨上尉(安徽人、保定軍校第八期卒)と第三隊々長金佛莊上尉(浙江人、保定軍校第八期卒)は廖仲愷の推薦、第四隊々長李偉章上尉(雲南人、雲南講武堂卒)は王柏齡の推薦であった。⁽¹⁾ 廖の推した茅と金はいずれも優れた共產黨員であったことを考えると、廖はもっとも共產党・バラディーンに近かった老国民党員であったといえる。この四人の隊長の下に、四月三〇日の考試で合格して採用された下級幹部が、准尉、少尉、中尉の区隊長、分隊長として配属され、学生を直接指導することになった。郭一予の回憶によれば、学生隊の組織は、隊―区隊―分隊で、各隊は三つの区隊、各区隊は三つの分隊よりなり、各分隊には学生一二名が属した⁽²⁾という。『黄埔軍校史料』には、隊―区隊という組織で、それぞれの隊長、区隊長名があり、区隊長の中に、下級幹部に合格した、第一隊第三区隊長王声聰中尉、第三隊第二区隊長吳濟民中尉らの名が見える。⁽³⁾

こうして集まった四九九人の学生、隊長、区隊長らを前にして、五月八日午前九時、校長蒋介石は次のような訓詞を行なった。第一期生に対する校長の訓詞は、以後、彼らの卒業まで連続三〇回続くことになるが、『国軍政工史稿』によれば、黄埔軍校の特色たる政治教育を行なうべき廖仲愷党代表、政治部主任の戴伝賢、政治部教官に指名された

汪兆銘、胡漢民、邵元沖らは、孫文の補佐に多忙で時間がなかつたので、校長がこの政治教科をうめるべく、自らこの「精神教育」の主講人となつたのだという。チェレパノフは蔣介石のこの連続講話を「もったいぶつた演説」⁽⁴⁾ promptous speeches とけなしたが、ともあれ蔣介石は学生への第一声で國民を水火の中から救い出す、死をおそれぬ不倒の鉄人たれと呼びかける革命的三民主義者として立ち現れた。その大意、

「中華民族は衰退し、民権は剝奪され、民生はふみにじられ、国家は禍乱の中にある。本党のこの学校は、國民を水火の中から救い出すのが目的である」。そのためには一人が千人に当る「不倒の鉄人」たらなければならず、かつ、「自己自身をも革命」しなければならぬ。「革命党の党綱要」「革命党の紀律」「学校の規則命令」を守り、「吃飽穿暖」や「升官發財」を考えるな。革命の事業を遂行するには、「人となる」(做人)の意義を理解しなければならない。我々の旧き習慣、思想、行動の一切を捨て、新たな人間、真の人間となれ。そもそも、我々軍人の職分、目的は、ただ一ヶの死の字あるのみであるが、我々の生命は自己の死とともに終るのではなくて、我々の子々孫々まで継承されていくものである。古人の言に「死に泰山より重きあり、鴻毛より軽きあり」とあるが、我々が死んだとしても、生き残つた者が必ず我々の事業を継承してくれるだろう。中国が列強の圧迫を受け、いささかの自由もなく、鞭打たれ、牛馬のようであるのは何故か。國民は搾取され、人民の生活は悲惨で、民国以来十数年、革命が成功しないのは何故か。もうわかつてもらえたとする。諸君は学生としての地位、責任、目的、本分をよくわきまえ、学問、職務、品格、自己鍛練にはげんでほしい。

翌五月九日から三十一日まで、この第一期生は「予備教育」期に入った。学生たちは、ほとんどが「普通社会」の長髪「文書生」であつたため、中国の社会通念としての武の軽視を共有し、軍隊の生活への適応に苦勞したようであ

る。髪を切られて丸坊主にされ（かなりのショックであったようだ）、軍服の着方もわからず、草鞋のはき方にとまどった。彼らは中国全土からこの南方の広州に結集した者たちで、王仲廉によれば、軍校に入って次のような苦勞があったという。⁽⁶⁾一つは食事で一〇分間という短い時間に終えなければならなかったこと、空腹極まりないのに南方の米飯を食べなれぬため、途中で箸をおかねばならなかったことを残念そうに回憶している。一つはまた、先にあげた草鞋で、学生時代、布靴、皮靴であったが、ここでは草鞋ばきで、足のつま先、足のうら、に生ま傷が絶えなかったと述べている。また一つは、言葉の問題で、講義の際、教官の言葉がわからず、自習時間に教官に尋ねてやっと講義の穴を埋めたという。

黄埔軍校のカリキュラムは、軍校一般にそうであるが、術科と学科に分れたが、さらに黄埔の特色となる政治教育が加わった。しかしこの予備教育期にはまだ軌道に乗らず術科が中心となった。

まず術科としては、「歩兵操典」に従って、気をつけ、休め、からはじまり、左（右）むけ、前（左、右）にならえ、隊形変換といった軍隊として最も基本的な動作がたたき込まれた。『史稿』によれば、入校以後、術科では、まず「単人徒手教練」（ここで上にあげた各種の歩法と転法を習う）を教え、個人の動作が習熟してのち、班教練、排教練さらに營教練へと進み、さらにこの密集隊形での方向転換、隊形変換などを教えた⁽⁷⁾とある。これは日本陸軍（陸士）の『歩兵操典』の第一篇各個教練の第一章徒手執銃の部分（但しこの予備教育期では銃がたらず、執銃の部分はできなかったかもしれぬ）と、第二篇中隊教練の密集散開の部分に当る。⁽⁸⁾

学科においても、この予備教育期で、まず学生たちに教えこまれたのは、『歩兵操典』であった。王柏齡の回想録中に戦術教程、兵器教程その他のテキストは自分が書きあげたとあり、王自身日本陸士の出身であることを考えあわ

せると、『歩兵操典』のテキストも日本(陸士)の影響が甚大と思われる。事実、資料の残っている第三期生の予備教育期間(三ヶ月間)のカリキュラムを見れば(第一期生よりすこし充実しているが基本的には同じとみられる)、それは日本の『歩兵操典』、『戦闘要綱』の一部分からの抜粋であることがわかる。つまり、『歩兵操典』の各個徒手、執銃教練の部分、中隊の散兵教練と分隊の散開攻撃の部分、『戦闘要綱』の戦闘指揮と諸兵種の運用及協同の部分が教えられた。王柏齡の回想するように、六ヶ月で実際の戦闘に役立つ士官を養成するカリキュラムなどどこにもないから、自分の学び卒業した日本陸士のものを、極度に実践向きに圧縮したのである(基本的動作と中小隊の疏開教練中心であることがそれを示す)。

四九九人の学生たちは、五月の末まで、みっちりこの各個教練と中隊、分隊(班、排、連)の執銃なしの徒手教練の理論と実践をたたきこまれた。理論(学科)は午前中の頭脳明晰なときに、実践(術科)は午後。孫元良は回想している。「入校して二週間、各人に一着の軍服(上下)を支給されたただけなので、洗濯もできなかった。広州の炎熱下での激しい操練に汗と泥にまみれ、すざましい臭気を発した⁽¹⁰⁾」と。

黄埔軍校のきわだった特色である政治教育は、既にのべたように、この一九二四年五月の間には、まだおこなわれていない。その代りに、党代表廖仲愷、政治部の主任や教官の特別講演会が大講堂に全学生を集めて行われ、かつ、校長蔣介石の精神訓詞なるものが、この五月間の予備教育期に九回に亘って講ぜられた。以下この全講演を簡潔に紹介し、学生たちにたたき込まれた思想教育の全体像を明らかにしよう。講演者と講演日をあらかじめ示せば次のようである。⁽¹¹⁾

① 校長第一次訓詞

五月八日 午前九時

- ② 廖党代表第一次講演 五月一日一三時
- ③ 校長第二次訓詞 同 一四時
- ④ 廖党代表第二次講演 五月一日一三時
- ⑤ 政治部教官邵元冲講演 同 一三時
- ⑥ 校長第三次訓詞 同 一四時
- ⑦ 政治部教官胡漢民講演 五月二〇日
- ⑧ 校長第四次訓詞 同 一四時
- ⑨ 政治部主任戴伝賢講演 五月二一日一一時
- ⑩ 校長第五次訓詞 同 同
- ⑪ 第六 五月二四日 同
- ⑫ 第七 五月二五日 同
- ⑬ 第八 五月二七日一三時
- ⑭ 第九 五月二八日 同

廖仲愷の最初の講演は、ほぼ次のようにいう。中国の最大の欠点は統一ある組織、統一の意考、統一の精神の欠如である。ロシアは革命以後、国勢は日々盛んとなった。これは人材とか工業商業の發達によるのではない。組織をもち、計画をもつ共産党が政權をとり、国家改造の一切の事業は、統一ある組織、統一ある意志、統一ある精神を發揮し、ソヴェエト共和国の新生命となった。この革命の三要件をここ国民党から、いな本校から始めようではないか

と。第二回目の講演もこの革命の三要件に関連する。諸君は旧社会からこの学校に入学してきた。だから旧社会のよき点、悪しき点もこの軍校に混入してきた。中国の悪しき旧慣は起居飲食に秩序なきことである。諸君は秩序規律をむしろ心よきものと感じなければならぬ、と説いた。廖は新生ソ連にならった「鉄の規律」をもつ革命軍による、革命の遂行を強調したのである。

政治部教官の邵元冲⁽¹²⁾は中国の国際国内状況から軍人の必要性を説いた。軍校は高等軍人を養成して革命事業を行うところである。我々が革命を必要とするのは、政治が紊乱し、社会が腐敗し、軍閥政客が専横跋扈し、のみならず彼らは列強と結び中国はその植民地となり、中国人はその圧迫下、あたかも巨大な監獄の中の囚人の如く、列強はこの獄舎の首切り役人なのである。我々はこの苦境を脱し、四億の囚人を解放しなければならない。列強は今や欧州より目を転じ、中国を「瓜分」しその版図を拡げようとしている。かつて、黄花崗烈士は満州政府打倒のために死に、彭家珍は満人良弼を暗殺し、王明山烈士らは袁世凱の手先鄭汝成を暗殺した。こういった烈士の革命精神はまさに模範とすべきであるが、今や我々はこういった暗殺の手段ではなくて、革命軍を組織し、革命精神を持続させ、革命の規律、革命の命令に服従し、国家の大事を解決しなければならぬと。中国共産党側の黄埔軍校史では、「国民党右派分子邵元冲の講演は一番歓迎されず、『催眠術教官』といわれた⁽¹³⁾」と伝えているが、この講演では反軍閥、反列強を語り、革命を強調する急進的ナショナルリストとして発言している。中国を巨大な獄舎に、中国人を四億の囚人に譬え、そこからの解放を説くこの講演のイメージは鮮烈であると思われる。

胡漢民もまた革命的なナショナルリストとして発言した。中国はいま軍人の横行、軍人の不好が頂点に達している。そもそも軍人はなぜ必要なのか。もし猛獸がおそってきたら我々はこれに対抗しなければならぬ。軍人はまさにこの

必要から生まれた。ところが後になって軍人は腐敗し、むしろ百姓・社会の害となった。我々はこの悪しき軍人たちを追放しなければならぬ。しかも他方、中国が外国の欺凌を受け、国民はこれに憤り、新しい兵士たちは国家のためにその義務を尽そうとしている。この軍人の精神は「義理の勇」つまり主義にもとづく勇といひ換え得よう。諸君はここで非常につらいことと思うが、この辛苦を快楽とみなせ。そして自分たちの目的、責任を理解し、この短い期間に十分に修養をつめよ。ここでは素朴ながら、反帝国主義、反軍閥の革命戦を闘いぬく、確乎たる主義をもつ軍人の創出が説かれていることを確認しておこう。

政治部主任戴伝賢は日本と中国を比較しつつ「群性」つまり団体の訓練・組織の必要性を強調した。曰く、今の中国人には「団体の訓練」、「組織の能力」が欠如している。日本は中国より遅れて欧州の文化をとり入れたが、いまや政治、工業、商業で中国を凌駕しているのは、団体の訓練、組織・能力による。中国人もようやくここ二、三〇年来、次第に国家を認識するようになってきたが、大多数の人々はいまだしである。団体は散漫、組織の方法もない。諸君、この学校でなぜ紀律、組織が必要なのか。団体・組織は規律によって成り立つのだ。外国資本主義の圧迫はねのけ、三民主義にとって代えるには、この団体の力が必要であり、そうしてはじめて中国は平等の社会に到達できる。中国の成敗、民族の興亡は、まさにここにあると。戴は孫文の側近として早くからソ連への共感を抱き、中国共産党の創立にも関与した。のち、反共のチャンピオンとなるが、ここでは、まだ、革命的戦闘的な三民主義者として発言していることに注目しよう。

校長蔣介石の訓詞の第一回は既に見たように、革命の担い手の主体的な確立を要求したもので、この死をおそれぬ軍人が国民を解放するというテーマは、「視死如帰」の犠牲的精神の強調（第三回）、自己をきたえて「不倒の鉄人」

たれとの主張（第四回）、堅い志を立てて三民主義を実行せよ（第五回）、我々を養う人民を解放せよ（第九回）との論としてくり返し展開された。第七回の五月二五日、不足分の銃一五〇丁が届いたとき、銃とは「百姓と国家を守り」、人道主義を守り、三民主義を実現するものと説き、更に、敵の捕虜となり辱かしめをうけたとき自殺に用いるものと述べた。国民の解放とは、彼にあっては、具体的には軍閥の打倒にはかならず、これは繰り返し説かれたが、しかし、既に述べたようにこの五月の予備教育期を通じて、蔣介石は反列強、帝國主義打倒をいわず、まして国民革命なる言葉は一度も語られることはなかった。軍人という先覚者による人民の解放というエリート主義に基本的に立っていることをここで確認しておこう。

五月で予備教育期を終え、六月から六ヶ月間の正式訓練期に入った。六一八月を前期三ヶ月、九―十一月を後期三ヶ月と称した。『史稿』によれば、一期生の学科は、「歩兵操典」の摘要と「野外勤務令」の摘要、そして「射撃教範」といった基礎的な軍事知識の教授から、さらに進んで戦術学、兵器学、交通学、築城の四大教科、そのほか軍制学、軍隊内務規則、陸軍礼節、軍語軍隊符号などは要点だけが教えられ、さらに戦術作業、実地測図など軍事学に必要なものは、この短い間に、すべて教授された¹⁵という。

歩兵操典の摘要、野外勤務令の摘要は予備教育期間中に教授が終ったはずであり、射撃教範は銃が不足で消化できなかったかと思われる。歩兵操典摘要は、既に述べたように、日本陸軍のものに圧縮摘要であり、野外勤務令摘要は第三期生のものであるが、①地形識別、②距離測定、③偵探、④行軍警戒、前衛の任務区分、⑤尖兵、⑥前衛独立攻撃の時期、⑦側衛、⑧後衛、⑨前哨の任務、⑩排哨、⑪歩哨、⑫一般守則、⑬巡哨、⑭戦鬪準備の一四項よりなり、この内容から察するに、日本陸軍の陣中要務令のことと思われる。①②は来源不明であるが、③偵探は陣中要務令第

三篇第三節の斥候に当り、④⑬は、すべて、同第五篇の警戒の章に見られる。⁽¹⁶⁾〔⑤の尖兵とは尖兵中隊で、前方を前進し主として行進路上の搜索に当るもの(一五四条)、⑥の前衛独立攻撃の時期は該当条項がないように思われるが、第一四五条に「行軍間に於ける警戒は前衛、側衛、又は後衛を以てす」とあり、この前衛の役割の特殊ケースを規定したものであるうか。前哨は駐軍間における警戒であり(一七〇条)、排哨とは排つまり小隊で、陣中要務令の前哨中隊(二〇二条以下)に、巡哨とは巡察(二三四条)に当ると思われる。ただ⑭の戦闘準備は来源不明である〕。要するに野外勤務令とは陣中要務令の第五篇警戒を中心に構成されたものとみることができ。射撃教範の摘要は、①弾道の形状と物理の關係、②天候武器彈藥操作と彈道の關係、③遮避界、危險界、安全界、④彈擊散布の景狀、⑤射擊予習、⑥基本射擊、⑦戦闘射擊、⑧夜間射擊と間接射擊、⑨射撃場の勤務の九項よりなる。⁽¹⁷⁾

さて、戦術、兵器、交通築城の四大教科もまた歩兵操典と同じく、陸士のもの縮少翻訳であると思われる。いま第一期生のテキストの詳細は不明であるが、すこし後の第四期生の学生隊教育細則には、各教科の講義概要が示されているが、それは陸士における教科の概要とほぼ同じ内容であるからである。以下、繁をいとわず例挙すれば⁽¹⁸⁾(最初に黄埔を、あとに陸士のを併記す)、

戦術学…用兵の概要、戦闘の種別、各兵種の性能、隊形運動、戦闘、陣中勤務及び一般戦闘に関する諸原則と要塞戦術の概要を教える(黄埔)。

戦闘及陣中勤務に関する諸般の原則及要塞戦術の概要を教授すべし(陸士)。

築城学…築城の諸原則、地形を判断し、諸種の物件を用い、堅固の陣地並びに一免の陣地内の交通設備を構造するを教う(黄埔)。

築城に関する諸原則、又攻撃防禦における築城の素質、編成並びに作業実施の要領を教授すべし(陸士)。

兵器学…兵器の構造一般の原理、現用する兵器の機能の概要及びその効力、用法、保存法等を教う(黄埔)。

兵器の構造及機能に関する一般の原理を教授すべし(陸士)。

交通学…軍事上重要な関係をもつ交通機関の機能、利用、及びその建設の概要並びに破壊の方法を教う(黄埔)。
交通施設及交通機関につき機能、別用、建設の概要並びに遮断の方法を教授すべし(陸士)。

黄埔の場合やや詳細になってはいるが、基本的には大差なく、黄埔軍校が陸士を範としてみるとよい。ただ中国の実情に合わせて字句の変更を行った例として軍制学の場合がある。陸士では「帝国軍制の由来及平戦両時に於ける陸軍の諸制度を教授すべし」とあるを、黄埔軍校では「軍制の要旨、中国軍制沿革の概要、国民革命の建制、保育及国内各軍編成の異同等を教う」とした。なお黄埔軍校での軍隊内務規則とは陸軍軍隊内務書の選択抜粹⁽¹⁹⁾、陸軍礼節とは陸軍礼式令の選択抜粹⁽²⁰⁾(天皇に対する敬礼の条を省くなど)である。内容にわたらぬ講義概要だけの比較であるから正確を期したいが、王柏齡や何応欽といった黄埔軍校の中心人物が陸士出身であること、しかもチェルパノフらソ連顧問との意志疏通が十分でなかったことなど考えあわせれば、両者の類似性を見出せない方がむしろ当然なのではあるまいか。

すでに述べたように、黄埔軍校の著しい特色である政治教育は、この第一期では十分に行なわれていない(この状況は第三期生まで続く。一九二五年九月一日入伍の第四期生から一挙に充実したものとなる)。初代の政治部主任は戴伝賢(五月一〇日任命)、副主任は張崧年(六月一七日任命)であった。しかし戴は五月一〇日就任間もなく、共產党と国民党の二つの中心があるため猜疑や排斥がおこっているが、ともかく国民党は合作に努力し共產党は党籍を

犠牲にして純粋な国民党员となるべきであると力説したが容れられず、憤然として上海に帰ってしまふ(六月末)。孫文の慰留を受けて広州に戻るも、「老同志」の「横逆」に腹をたて、また上海に帰る。この一年間に戴は三度広州に來り、三度去るといふあわただしさであった。⁽²¹⁾この間、政治部は主任不在ということになる。副主任張巖年⁽²²⁾は北京大学教授で李大釗の親友であるが、軍校政治部副主任としての活動ぶりは定かではない。この最初期、政治部に具体的組織なく、一人の秘書(甘乃光)と二人の書記が置かれたのみであり、毎週人を招いて講演を依頼し、大講堂に学生全員を集めて聴講させ辛うじて政治課程のカリキュラムをこなしていた。⁽²³⁾政治部教官の邵元冲が戴をひきついで主任(代理)となるも、ほとんど変化なく、ただ二回の政治討論会を開いただけであった。孫文の北上に邵元冲も同行し(一九二四年一月一三日広州を離れる)、ここで周恩来が代理主任を引き継ぎ、政治部は次第に面目を一新していくのである。このとき既に第一期生は卒業間近か(一月三〇日卒業)であり、すでに第二期生四四九名は入校している(一九二四年八月一日入校)。

従つて、この第一期生の政治教育は、政治部教官によつて次のような科目が講ぜられはしたが、やはり校長蔣介石の精神訓詞が中心となる。

- 。三民主義 全八時間 胡漢民
- 。本党史 全六時間 汪精衛及政治教官
- 。本党之組織問題 全四時間
- 。本党之宣言訓令 全四時間
- 。経済学概論 全六時間 戴、邵、甘乃光

一時間は七〇分授業で、以上の六科目全三四時間が一期生に与えられた正規の政治教育のすべてである。各教官がいかなる講義を行なったかは不明であるが、汪精衛の講義「本党党史」は『汪精衛全集』中の「中国国民党史概論」がこれに当るものと思われる。汪のこの概論は孫文なきあと一九二五年度に黄埔二、三期生に対して行なった講義録と推察され、恐らく一期生に対してもほぼ同内容のものが講ぜられたであろう。それは、革命の発生が時代の要求であるとの基本認識に立ち、民族、民権、民生の三民主義の観点から革命発生の原因をたずね、最近時に至っては経済的な収奪を目的とする帝国主義の登場によって、国内では一般労働者が圧迫され、国外では植民化が進められ、アヘン戦争以降、特に最近時に至って、中国の国家と種族の存亡をかけた激烈な闘争が生じるに至ったと述べ、今日の革命はこの帝国主義の打倒にあると結論した（さらに一八八五年から一九二五年までを一〇年単位の五期に分け、詳細な分析を試みている）。邵元冲の経済学、政治学の講義内容は明らかではないが一九二四年の間において、彼は中国国民党講習所で「近代革命運動の方法及策略」なる講演（七月）を行ない、またこの時期に『美国劳工状況』なる著書も出している。政治、経済学は得意の分野であったと推察しうる。政治部秘書の甘乃光（一八九七—一九五六）は広西の人、嶺南大学経済系卒業であるから経済学を担当したのであろう。⁽²⁶⁾

校長蔣介石の精神訓詞に入る前に、是非言及しておかなければならないのは、一九二四年六月一六日の軍校の正式開学式典における孫文の演説である。学生は既に五月上旬に入学していたが、その日に入学式を行なわず、孫文のかつての同盟者・陳炯明の孫文に反逆した六月一六日をもって開学の日と定めたのは孫文の強い意向による。その前日、一五日の夜七時から前夜祭が黄埔軍校の雨天体操場で行なわれた。この夜のパーティの様は大変興味あるもの

である。「中国国民党周刊」第二六期（一九二四年六月二二日号）によれば次のようであった。主催者は中央執行委員会（胡漢民、廖仲愷、鄒魯、譚平山、彭素民）と広州市党部（孫科、呉鉄城、鄧演達ら）で、軍校の全教職員、学生六〇〇余人が加わった。まず、譚延闓が中執を代表して乾杯の音頭をとり、宴半ばに至って汪精衛が祝詞をのべ、学問と主義と犠牲的精神ある黨員の先導によってこそ革命は成功する、かつては党に自兵がなかったから失敗を重ねてきたのだと語り終って、全員が杯を挙げて再び乾杯した。学生代表の某君が「我々は中央執行委員会の教えを謹んで守り、党のため主義のために命をささげます」とのべ、「三民主義、総理、中央執行委員会万歳！」と大呼した。ついで、孫科（孫文の子息）が、諸君は升官発財のためでなく、全中国人の幸福のために苦しい訓練に耐えてきた、これこそ党を愛し国を愛する熱誠のあらわれであると述べ、ここでまた乾杯が行なわれた。ついで、校長の蔣介石が学生教職員に「氣をつけ」の号令をかけて、本校の衣食住用具はすべて中央執行委員会の多くの血と汗によってできたものである、汪先生のいわれたように「軍隊がなければ党なく、党なくば国なし」である、すべからくこの身をもって党のために犠牲となり、中央執行委員会の厚望にそむくなかれと訓じ、全員に「中国国民党万歳！」を三唱させた。この宴を取材した記者は、このとき「皆一斉に拳こぶしをふりあげ、万歳の声は山や谷を震わせるごとく、記者はこのとき恍として黄龍を痛飲するが如し」と記していた。宴は夜八時すぎに終わった。翌一六日、孫文の臨席をおおぎ、開学の式典がおごそかに行なわれた。⁽²⁷⁾孫文は「親愛精誠」を本軍校の軍訓とし、四九九人の学生を前に次のような演説を行なった。

まず冒頭に「来賓、教員、学生諸君、今日は本校の開学の日である。我々はなぜこのような学校を作ったのか」と問い、「中国の革命はこの一三年間〔辛亥革命以後の年数〕完全に失敗であった」。ところが六年前ロシアで革命が成

功した。なぜロシアの革命は中国よりも短期間で成功したのだろうか。その理由は一つである。「革命軍」の存在である。中国の革命では命をすてた党员（七二烈士）がいて清朝を倒したが、「一部の成功」にすぎなかった。「我々の革命はただ革命党の奮闘だけがあり、革命軍の奮闘がなかった」といえる。「今日ここにこの学校を開いた唯一無二の希望は」「諸君らを根幹として」「革命軍を作りあげ中国の危亡を救うためである」。以上第一段である。ソ連の赤軍にならって、ここ黄埔で革命軍の幹部を養成しようとの意図を明らかにした。なぜロシアは中国よりも早く革命が成功したのか。孫文は次のような両国の比較を行っている。

対内的には

中国…満州皇帝の力は弱まり政治は腐敗す、

俄国…ツァーは同じロシア人であり教主でもあり、国力は世界最強。

対外的には

中国…辛亥革命後、直接的な外国の武力干渉なし、

俄国…革命後、外国の武力、言論の干渉極めて大。

つまり中国の方がいずれの条件においても革命が容易であるはずなのに、なぜロシアの方が中国よりも早く革命に成功したのかと問ひ、その答に革命軍赤軍の存在を第一にあげたのである。

第二段はこの革命軍の定義にあてて。それでは「いかなるものを革命軍というのか」。それは革命の「先烈を模範とし」「革命党に学ぶこと」、つまり、かつて幾度も孫文と共に革命に挺進してきた革命党と同じような軍隊があれば、これを革命軍と呼ぶことができよう。陳炯明の如く利害が反すると直ちに反乱をおこすのは、「革命主義」を理

解しない「自利自私の軍隊」であり、我々の革命がすべて失敗してきたのも、そのような軍隊に依存してきたためであった。

第三段、しからば理想的な革命軍を創造するにはどうすべきか。まず「自己の心理上の革命」を行なわねばならぬ。旧思想・旧習慣など一切の悪しきものを革除せよ、そして「革命の志気を樹立せよ」。いま中国には二種の悪しき軍人がいる。一つは革命党内にいて口先だけで革命をいう者、一つは党外の反革命者で升官発財だけを考え専制に戻ろうとする者である。諸君はこのような軍人、このような悪しき軍閥を消滅させなければならない。過去の革命党と比べると、諸君は今や軍事教育あり、武器あり、五百人もいる。「もし真の革命志気〔革命精神〕があれば、五百人と五百丁の銃で一つの巨大な革命事業ができるはずである」。

第四段は前段を受けて、真の革命精神を獲得するにはどうしたらよいかを述べる。「志を立て革命の軍を創造するにはいかなる根本が必要か」。それは「高く深い学問があることを根本とする」。毎日、教室では教官の教えることをよく学びとり、更に自分の力でそれを推し広めるように。教室の外では軍事や革命に関する書物や雑誌に目を通し、自学自習の工夫をせよ。そうすれば自然と「革命精神」、「先烈に続こうとの願望」が湧いてきて、三民主義を実現させ、革命は大いなる成功を告げよう。

最終段、再び冒頭の軍校設立の話に立ち戻る。この学校は革命軍を作るものである。諸君は将来この革命軍の根幹となり、救国救民の責任をもつものである。一人で百人に当り、先烈のように全てを擲って「死を恐れぬ革命軍人（不怕死的革命軍人）」になつてほしい。革命党の秘訣は「不怕死」にほかならぬ。この大勇氣、大決心があれば、一人で百人に当ることができ、「我々の観念は死を以て幸福となす」というもので、陳天華、楊徳生の先例がある。

共和国を守り、悪徳軍閥を倒すには、諸君は死を恐れずに革命の先烈の途を歩み、更にこの五百人を基礎として我々の理想とする革命軍を作らねばならない。中国の「救国救民」の責任を、諸君よ、今日から共に担おう、で終わる。

孫文のこの講演は大変に理論的であり、設問を提示し、巧みに例挙しつつこれに自答していくという展開を辿る。「不怕死的革命軍人」から成る革命軍が悪しき軍閥を倒し、三民主義の共和国を実現させるというエリート主義に立ち、人民への言及が欠如するのは、軍校の開学式という特殊事情を考慮してもなお、孫文の思想が基本的に三大政策（連ソ、容共、扶助農工）実行のこの段階においても、急進的ブルジョアデモクラットのそれであることを示している。孫文のこの思想傾向を忠実に敷衍するのが、校長蔣介石の精神訓詞なのである。

蔣介石校長の三〇回にわたる精神訓詞を通観すればすでに述べたように、「死を恐れぬ軍人」が国民を解放するという思想で一貫している。但し、彼の訓詞は必ずしも論理的でなく、あるときは冗慢に、あるときは説明不足に流れる。いまこれをすこしくロジカルに組みかえて全体の論調を紹介しよう。⁽²⁸⁾

まず彼は軍人の資格とでもいうものを多言する。そもそも「死を恐れぬ軍人」とは犠牲的精神の發揮（第三回訓詞、以下数字のみ）、死を以て榮譽となす（一〇）こと、司馬遷の泰山、鴻毛の言葉をひき、主義、人類のために死ぬことを意味する（二七）と説く。中国人には升官發財、愚凶、無責任という悪習があり（一九、二六、二八）、こういった「亡国奴」の性格をきたえなおし軍人としての自覚を持つこと、この自覚こそが「死して後已む」という犠牲的精神の發揚となつて現われるとみた。

この覚醒せる軍人は、一個の国民党員として、あるいは本校の一学生として、「親愛精誠」（一、二二）あるいは革

命精神、あるいは三民主義（二一）のもとに団結集して、一つの巨大な革命勢力とならねばならぬ。また少数の精銳であるがこの団結力―それはとりもなおさず党綱軍紀校則に従うことよって可能となる（二〇、二八）―と組織力（二七）によつて中国解放のための障害を突破できよう（二六、二八）。

その打倒すべき敵は、互に手を結び利用しあつてゐる帝国主義、腐敗せる軍閥、土匪の三者に他ならぬ（二三）。国民を水火の中に投げこみ国民を牛馬の如き地位に落している軍閥（九）を打倒すること、とりわけまず第一に打倒しなければならぬのは帝国主義である（二三）。

その手本はすでにある。それはソ連の革命でありソ連の赤軍である（二一、一四、一八、二三、二六、二七）。蔣介石がこの時点において熱烈なソ連賛美者として「赤色將軍」として登場してゐることは、何ら異とするに足りない。既に見た政治部の教官においても、そして孫文自らも、この最初の国共合作期においては、もつとも「左傾」した時期であり、誰もが、反帝・反軍閥主義者として発言したのであつた。

しからば、蔣介石はどのようにソ連を評価・賛美したのであろうか。いくつか例挙してみよう。

①我々はソ連に学ばねばならぬ。一九一七年ソ連共産党員は一人の割であつたが、これでもつてロシアの大多数の人々の「思想改変」を行ない、共産党に「同情」させて腐敗せる専制政府を打倒した。国民党員は中国人千人に一人の割であるから、ロシア革命よりも更に容易である筈である。にもかかわらずロシア革命の方が先に成功したのは何故か。これはソ連共産党員が国家のため群衆のために、わが身をすてる犠牲的精神を持っていたからである（一四）。

②ソ連軍事顧問団団長パヴロフ將軍の言によれば、ソ連の革命軍の戦術はこれまでのドイツ、フランスの戦術にと

られない独創的なものであるという。我々中国人もソ連人のように外国の戦術にとらわれてはならぬ(二八)。

③ロシア革命政府が帝国主義に破られなかったのは、天の時(厳冬に守られた)、地の利(国土の広大、革命の根拠地モスコウが守られた)、人の和(人民の共産党援助)を得たからである(二三)。

④ソ連の赤軍には一部隊が退却したら隊長が銃殺されるという規定があり、軍人はこのため敵に臨んで退却しなかった。我國の岳飛や戚繼光の治軍も大変厳しかったと述べ、鉄の規律を要求する革命連坐法を説明した(二七)。

見られる通り蒋介石のソ連賛美は専らその軍事的技術面に限られ、ソ連共産党の主義思想に共鳴したわけではない。軍閥、帝国主義、土匪を打倒する軍事面ではソ連赤軍にならない、人民を喚起する主義思想は孫文の三民主義に依拠する。「三民主義は中国を救い人類を救う唯一の主義」(一七)といい、三民主義に反すれば父母であろうと敵である(二五)という。ここに蒋介石の三民主義の徒としてのあるいはナショナリストとしての本領がある。

この時点における反軍閥反帝国主義者としての蒋介石は、のち軍閥とも妥協して反共に転ずる訳であるが、この三〇回の連続講演を通観してみると、やがて反共に転ずる思想的な萌芽が、すてにはっきりと読みとれる。その一つが既にのべた反人民主義とでもいうエリート主義であり、また一つはK・ポパーのいう漸進主義的思考とでもいべきもの、および伝統への強い傾斜の三傾向である。つまりこういうことである。軍校の校長として学生たちに普通人とは違った使命観を強調するのは当然ではあろう。しかし一般兵士は農村出で確たる人生観なき者、将校は彼らに「畏懼」される存在であるべきだ(三〇)といい、「普通社会の一般人」は「散沙」の如く(二四)、君たち学生にして国民党員たる者は革命事業を担う「非常な人格」なのだ(一五)という主張には、明らかにエリート主義とその裏返しにの愚民観が強い底流をなしている。蒋介石には「一般人」はあくまで救済される客体にすぎず、革命

の主体ではない(三)との認識が強い。これはやがて蔣介石が国民革命に背を向け、列強とブルジョアジーに妥協していく一つの大きな要因となろう。他の一つはK・ポパーが名付けたユートピア的思考を彼がもち合わせていず、かつて、ピースミールと呼ぶ思考様式⁽⁴⁰⁾の方がずっと強いことである。現在の中国の国家社会は腐敗の極に達しているが、「青年一時の意気」でもってこれを一挙に改めようと思うな、我々の地道な感化によって「ゆっくりと改良」(慢改良)していくべきである(二四)というような主張は、ポパーの漸次的社会工学の基本的思考に当る。それに対して「青年一時の意気」に燃え、終末を間近と考え、革命時の到来を確信する共産党員(たとえば李大釗)とは本質的に異なる思考態度といえよう。この思考態度の違いこそやがて蔣介石が共産党と決別していく大きな要因となる。さらに、ナシヨナリズムの主要要素として、F・ハーツやH・コーンも述べるように、歴史伝統の重視がある⁽⁴¹⁾。ナシヨナリズムの時代において、この伝統主義がどう作用するかは多様であるが、中国のこの大革命期においては、すくなくとも反帝反軍閥のナシヨナルな思考を加速するプラスの作用をもった。蔣介石においても旧社会のあり様全体が否定の対象になりつつも、なお、戚継光、曾国藩、胡林翼といった過去の軍人が呼び出され(二五、二七)、革命的軍人養成の手引きとされたのである。伝統の否定と伝統の受容との微妙なバランスがあり、状況に応じていずれかが強調されるという蔣介石のプラグマティックな態度に留意しておく。

軍校の創立を問題にした我々の行論も、蔣介石の連続講演を扱ったため、設立初期からすでに六ヶ月以上も深入りしてしまった。軍校一期生の教育が順調に進みだした丁度そのときは、まさに中国の大革命の幕が切っておとされる秋であり、国民党と共産党の対立の顕在化、広州ブルジョアジーとの対決(商団事件)、孫文の北上と、軍校もようやくあわただしさを増してくるのである。これについては又別に稿を改めて述べることになる。

註

- (1) 王柏齡『黃埔軍官學校之回憶』(一)、伝記文学、一六三号、八六頁。
- (2) 『黃埔軍校史料』廣東人民出版社、一九八二年、三九、九八頁。しかしこの「予備教育」(二期生からは「入伍」といった)期では、隊一班という構成であつたと思われる。五月三十一日予備教育の最終日の検閲の講評で蔣介石は第一隊第五班というような呼び方をしているからである。『黃埔叢書』第一集「精神教育」所収の「校長検閲講評」(二二二頁を見よ)。
- (3) 『黃埔軍校史料』、『國軍政工史稿』(上)、『陸軍軍官學校史』(國防部印行、一九六九年、全六冊)によれば、下級幹部として実際に配属されたと判明した者は以下の如し。周得三少尉、王声聡中尉、呂敬藩少尉、張仲俠準尉、吳濟民中尉、李鴻鈞少尉、敵鳳儀中尉、王祿豊中尉、李叔文中尉、宋雲鏡少尉、符騰光少尉、韋兆熊電信隊長、宋一鳴、周漢偉の一四名である。
- (4) 『國軍政工史稿』上、國防部總政治部編印、一九六〇年、九三頁。
- (5) A. I. Cherepanov, As Military Adviser in China. Progress Publishers, Moscow, p. 84.
- (6) 王仲廉『征塵回憶』台北、発行人本人、一九七八年、一七一―八頁。
- (7) 『中央陸軍軍官學校史稿』(以下『史稿』とす) 第四編 軍事教育、二頁。『陸軍軍官學校史』(以下『校史』とす) 第四編 教育訓練、三四―五頁。
- (8) 対照に用いた『歩兵操典』は一九二八(昭和三)年改訂のものである。
- (9) 『校史』第四編 教育訓練、二八頁。「歩兵操典摘要」は次の一二三項よりなる。比較のために繁をいとわず全文をあげておく。一各個教練之目的及手段、二徒手教練各項之口令、三立正之姿勢及各種步伐、四持槍教練及各種射擊姿勢、五散兵教練及地物之利用、六連教練―連之編成、基本隊形及応用隊形、七變換方向、變換隊形、八疎開隊形之構成及運動、九散兵隊之構成及運動、十散兵隊之射擊及射擊軍紀、一一戰闘間幹部及兵士之責任、一二步兵对他兵種之動作、一三礼節大閱之制式。一一、一二が「戰闘要綱」から、他は「歩兵操典」からである。
- (10) 孫元良『孫元良回憶錄 億萬光年中的一瞬』台北、出版本人、一九七二年、六六頁。
- (11) 以下の一四講、すべて『黃埔叢書』第一集「精神教育」所収。
- (12) 邵元冲(一八九〇―一九三六)、浙江紹興の人。一九〇六年浙江高等學堂入学、〇九年拔貢生、一〇年鎮江地方審判庭長、辛亥後同盟会に入り、一全大会では毛沢東らとともに候補中執委、二七年南京政府の杭州市長、一九三六年西安事

件にまきこまれ乱兵に誤射殺された。

(13) 賈異之「黃埔建軍」『文史資料選輯』第二輯、一九六〇年所収、六頁。

(14) 一期生の修学期間を一年にするか半年にするかで、軍校準備段階で意見が岐れていた。一九二四年三月二八日蔣介石の廖仲愷宛電報で、先に六ヶ月としたのであるから一年にのばさないで原案通りにいくべきだと述べている（毛思誠「民國一五年以前之蔣介石先生」、二五〇―五一一頁）。他方、チェレパーノフは「六ヶ月の正式訓練案が孫文に認められた」（八二頁）といい、賈異之「黃埔建軍」は、ソ連赤軍の経験から一ヶ月の予備訓練と六ヶ月の正式訓練をソ連顧問たちが主張したと述べている。蔣介石の案はこの予備訓練期を考えていなかったと推察され、五月九日―三十一日予備教育期はソ連顧問の提案が通ったものであろう。しかしソ連顧問たちは言語の壁にへだてられ、この創設期の黃埔に大きな影響を与えることはなかった。ただ彼らは六ヶ月という短期卒業を考慮して理論より実践（訓練）を重視すべきことを繰り返して説いたようだ（チェレパーノフ、前掲書、八四頁）。

(15) 『史稿』第四編 軍事教育の二頁。この部分は『黃埔軍校史料』一四三―四四頁に再録されている。

(16) 『校史』第四編 教育訓練による。なお比較に用いた「陣中要務令」は大正一三年（一九二四）八月改訂のもの。これは、戦闘序列、命令、搜索、諜報、警戒、行軍、宿営、通信、給養衛生、戦場掃除、鉄道、憲兵、陣中日誌の一三篇より成る。

(17) 『校史』第四編 教育訓練、『史稿』第四編 軍事教育の章をみよ（第三期入伍生のものであるが）。日本陸軍（土）との対照関係は未調査である。

(18) 『史稿』第四編（第二冊の四六頁以下）。『校史』第四編 教育訓練（第三冊の五五頁以下）も同じ。日本側は、山崎正男編『陸軍士官学校』一九六九年、秋元書店、一七一―八頁。

(19) 軍隊内務規則は入伍期に学ぶ（三期生の場合六時間配当）。その内容は、一服従、称讃（日本陸軍の軍隊内務書―大正二年のもの―の第二、三章に当る、以下対応する章のみあげる）、二団營連長職務（第四、五、六章）、三団營本部諸官職務（第七章）、四連内諸官職務（第八章）、五值星勤務（第一章週番勤務）、六代理、風紀衛兵（第一章）、七起居検査、假期及外出（第三〇、三一章）、八衛生、禁閉室（第二三、一七章）

(20) 陸軍礼節（第三期入伍、全七時間、注(19)と同じく対応関係を示す（ややのちのものだが、日本陸軍は昭和一五年

- のもの)。一総則、敬礼通則(総則、第一篇敬礼、その通則)、二軍人之敬礼、室内之敬礼、室外之敬礼(一〇条、二〇条、二五条など)、三軍隊停止間之敬礼(七一条)、四軍隊行進間之敬礼(七一条)、五軍隊教練間之敬礼(八〇、八一条)、六歩哨之敬礼(八六―八八条)、七儀節隨扈(二一九条以下の儀仗兵のことか)、八儀隊大閱、礼砲、迎送軍旗(一〇四―一一条、一二―一八条、一四―一四四条)。総じて、天皇ニ対スル敬礼(三七―四五条)、拜神ノ敬礼(四六、四七条)、軍旗ニ関スル敬礼(四八―五三条)など天皇制にまつわる礼節は当然ながらすべて省かれている。
- (21) 『戴季陶先生編年伝記』中華叢書委員会印行、一九五八年、三七―八頁。『中国歴代思想家 戴季陶』李雲漢、台湾商務印書館、一九七八年、三二頁。戴は共産党の譚平山、老国民党員の張繼、謝持と意見が合わなかった。
- (22) 張松年(一八九五―)、河北獻県人、北京大学マルクス主義研究会のメンバー。一九二二年九月李大剣に代って代理北大図書館主任となる。ドイツで共産党に入党。政治部副主任を第三期まで勤めた。一九二五年一月共産党をはなれ、一九三〇年代は清華大学教授であった。司馬路『中共黨員暨文獻選粹』第一部、香港自聯出版社、一九七三年、二九九、三〇一―三〇二頁参照。E・スノー『中国の赤い星』(筑摩書房、一九七〇年)、二六頁。『陳公博周佛海回憶録合編』春秋出版社、一九七一、一五三頁。
- (23) 『黄埔軍校史料』一七八頁、覃異之「黄埔建軍」六頁。
- (24) 『陸軍軍官学校史』第五篇 政治訓練、五〇頁。『国軍政工史稿』上、九五―六頁。
- (25) 『汪精衛全集』上海三民公司、一九二九年、第五集所収。
- (26) 邵元沖の講演については、「国民党週刊」三三期(一九二四年八月三日号)と三五期(同年八月二十四日号)をみよ。甘乃光については『国軍政工史稿』上、九〇頁、その論文「列強之帝國主義与中国商工業之關係」については、同一四期(一九二四年三月三〇日)をみよ。
- (27) この開学の式典について、一期生の回想録、王柏齡などが言及している。又「国民党週刊」二六期(一九二四年六月二三日)、『国軍政工史稿』上(五四頁)にも詳しい。條文のこの日の演説は有名でどこでも見られる。『黄埔叢書』、『国軍政工史稿』上、五五―五六頁、『国父全集』第二冊(中国国民党中央委员会党史委员会編訂、六九―七〇三頁)では演題は「革命軍の基礎在高深の学問」となっている。
- (28) 蔣介石のこの訓詞の紹介としては、竹内実「現代中国への視角」上下、思想(一九七七年五、六月)の論文も見よ。

(29) 張国燾も、蒋介石が黄埔軍校を主持しはじめた頃は、「色彩是相当紅的」とのべ、一期中の共産党・共産主義青年団員八十余名を他の学生たちと別けへだてしなかった（一視同仁）という（『我的回憶』第二冊、明報月刊出版社、一九七三年、四五〇頁）。

(30) カール・R・ポパー『開かれた社会とその敵 第一部プラトンの呪文』内田詔夫・小河原誠訳、未來社、一九八〇年、第九章をみよ。ポパーの分類を使うなら、マルクス主義者こそユートピア工学の、蒋介石はピースミール社会工学の、まったく相い容れぬ思考態度を根底に持っていたといえよう。

(31) Frederick Hertz, *Nationality in History and Politics*, London, 1951, p. 21, Hans Kohn, *The Idea of Nationalism*, N. Y., 1961, pp 4-7.